宮崎市文化財調査報告書第79集

史跡　穆佐城跡

穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（Ⅳ）

2010

宮崎市教育委員会

序

国指定史跡穆佐城跡は、南北朝時代から約280年近い期間存続した山城で、南九州の中世史を語る上で需要な位置を占めています。南北朝時代には北朝方の九州の拠点的存在となり、その後は幾たびとなく島津氏と伊東氏との戦場の舞台になりました。

旧高岡町では平成８年度に「穆佐城跡保存整備基本計画」を策定し、歴史的な公園整備を進めてきました。平成14年３月には国史跡としての指定を受け、平成15年度からは「穆佐城跡保存整備事業」として、保存整備計画の見直しを行い、併せて発掘調査を実施しました。

平成18年１月の合併により高岡町は宮崎市となり、旧町の事業を引き継ぎ、「穆佐城跡保存整備専門委員会」を設置して、それに基づいた発掘調査を実施し、穆佐城跡保存整備事業を推進しているところです。今後も発掘調査を継続的に行い、穆佐城の歴史を解明しながら、市民の皆様に親しまれる史跡整備を進めてまいりたいと考えています。

本書は平成20年度、21年度に実施した穆佐城の主郭、曲輪７の調査成果を収めた概要報告書です。戦乱の世の中、主を次々に変えた穆佐城の歴史の一端を紐解き、中世史研究の一助として本書が広く活用されますことを願っています。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご教示をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様など、関係者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成22年３月

宮崎市教育委員会

教育長　田　原　健　二

例　言

1．本書は、平成20年度、平成21年度に実施した国指定史跡「穆佐城跡」の保存整備事業に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は宮崎市教育委員会が、文化庁、宮崎県教育委員会の援助を受けて実施した。
調査期間　平成20年度発掘調査：平成20年10月8日～平成21年3月12日
平成21年度発掘調査：平成21年6月25日～平成21年12月1日

3．発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。

4．調査組織
調査主体　　宮崎市教育委員会
(20年度)

文化財課	課長	小掠　聖
埋蔵文化財係	主幹兼係長	山田典嗣
調査事務	主査	松崎留美
調査員	技師	石村友規
	嘱託	島井伸幸（平成21年1月から）

(21年度)

文化財課	課長	永井淳生
埋蔵文化財係	係長	富永英典
調査事務	主査	松崎留美
調査員	主任技師	石村友規
	嘱託	鈴木弘子

5．現地における空中写真撮影は、有限会社スカイサーベイ九州に、自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。

6．掲載した遺構図面の実測は石村・島井・鈴木、遺物図面の実測は整理作業員が行い、製図・図版の作成は石村が行った。また現地における実測作業の一部は金丸武司・井上誠二（宮崎市教育委員会）の援助を得た。

7．写真撮影は石村が行った。

8．本書の執筆、編集は石村が行った。

9．現地調査において宮崎市立穆佐小学校、麓公民館を始め関係者各位のご協力を得た。
また以下の方々からご教示、ご指導を賜った。（順不同、敬称略）
千田嘉博（奈良大学教授）、谷口義信（宮崎大学名誉教授）、伊藤哲（宮崎大学教授）、包清博之（九州大学教授）、東憲章（宮崎県文化財課）

目　　次

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経緯 …… 1
2　遺跡の立地と環境 …… 1
3　穆佐城の概要 …… 3
4　既往の調査 …… 3

第Ⅱ章　調査区の設定と調査の概要

1　調査位置と目的 …… 4
2　基本層序 …… 5
3　調査の概要 …… 5

第Ⅲ章　調査成果

1　主要遺構 …… 8
2　小結 …… 16
3　出土遺物 …… 19

第Ⅳ章　総括…… 22

写真図版…… 23

指　図　目　次

第１図　穆佐城跡周辺遺跡図分布図 …… 2
第２図　穆佐城跡縄張り図 …… 4
第３図　曲輪７土層堆積基本層序模式図 …… 5
第４図　曲輪７発掘調査区位置図 …… 6
第５図　Ａ調査区東西セクション土層断面図 … 7
第６図　１号掘立柱建物実測図 …… 9
第７図　２号掘立柱建物実測図 …… 10
第８図　通路状遺構実測図 …… 11
第９図　中央堀・土坑実測図 …… 12
第10図　土塁土層堆積状況実測図 …… 13
第11図　Ｂ調査区南壁土層堆積状況実測図 …… 15
第12図　虎口実測図 …… 17
第13図　トレンチ内土坑実測図 …… 18
第14図　曲輪７出土遺物実測図 …… 20

表　目　次

第１表　出土遺物観察表 …… 21

写　真　図　版

図版１ …… 23
図版２ …… 24
図版３ …… 25
図版４ …… 26
図版５ …… 27
図版６ …… 28
図版７ …… 29

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経緯

穆佐城は宮崎の中世を代表する城郭として広く知られていたが、曲輪の配置や構造など不明な点が多かった。その解明の契機となったのが、平成２年度に千田嘉博氏（現奈良大学教授）を招聘し作成した縄張図である。その後、その縄張り図を基に平成 10 年まで６回に渡り確認調査が実施された。

平成８年に穆佐城跡保存整備基本計画が策定され、平成 10 年４月には地元住民や地権者の協力もあり高岡町（現宮崎市高岡町）指定史跡となった。さらに平成 13 年７月には「穆佐城跡」の国指定史跡の申請を行い、翌平成 14 年３月 19 日に国指定史跡に指定された。それを受けて平成 15 年度から継続的に保存整備を実施することになり、まず平成８年度に策定された穆佐城跡保存整備基本計画を見直し、内容を補足する目的で検討委員会を招集し、『穆佐城跡保存整備基本計画』を作成した。また並行して保存整備を目的とする発掘調査を行った。発掘調査は過去の調査が城域の東半部に限られていたため、西半部の状況を明らかにし、城館全体の概要を把握した上で、整備の中心となる地区を対象に発掘調査を進めることになった。そのため平成 16 年度も継続して西半部の調査を行い、資料の拡充を図った。

穆佐城遠景
－大淀川下流域を望む－

堀切Ⅱ
－北側から－

その後、平成 18 年１月に高岡町は宮崎市と合併し、新たに穆佐城保存整備専門委員会を招集、具体的に今後の保存整備計画の検討を行った。その結果、今後整備の中心となるＢ地区を対象に発掘調査を進めることとなった。

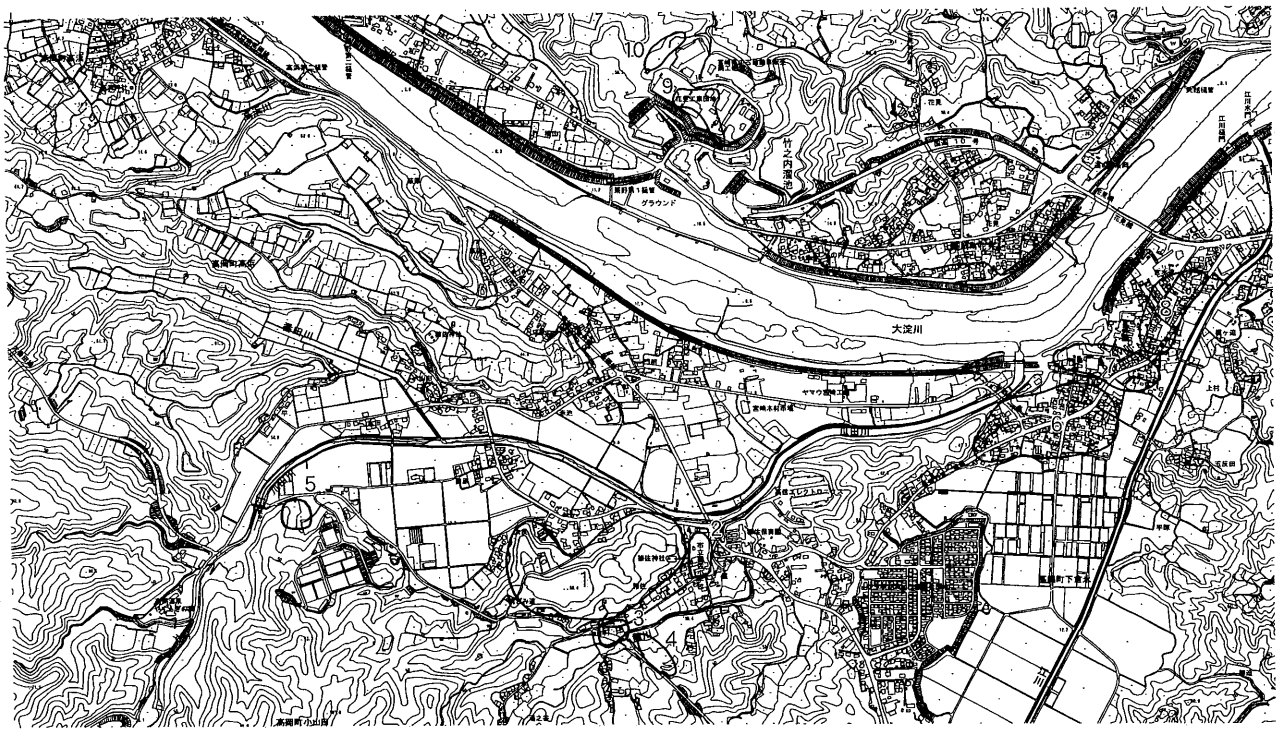
平成 18、19 年度は委員会を開催すると共に、島津忠国が誕生したとされる「坪之城」と想定される曲輪 20 を対象に発掘調査を行い、平成 19 年度に概要報告書を刊行した。

2　遺跡の立地と環境

穆佐城は宮崎市高岡町小山田に所在し、大淀川の支流である瓜田川の右岸に位置する西から東へと舌状に伸びる丘陵上に立地する。丘陵の北側は瓜田川が東流し、西側には丘陵が標高 100ｍ以上の山々へ連なり、南、東側には麓川が流れ自然の要害となっている。また周囲の水田との比高差は 45ｍ前後と大きな値ではないが、その斜面は一部を除いて急峻であり充分な防御機能を有している。

穆佐城からの眺望は特に北から東方向へ優れている。その中でも北東方向には倉岡城、遠くに宮崎城まで望むことができる。その一方で南から西方向の眺望は優れているとは言い難く、麓川によって形成された小谷を挟んで南側は、田野町との境界から広がる山々が眺望を遮り、西にもその山が半島状に突き出しているため眺望が遮られている。また大淀川の対岸、北西方向には同じ中世城郭である天ヶ城が所在するが、両城郭間には台地が存在するため眺望が良好とは言い難い。このように穆佐城の眺望は北から東方向、つまり穆佐城から見て大淀川下流方向に特化しており、その地をにらんだ立地と考えられる。

穆佐城周辺の中世の城郭としては、天ヶ城、倉岡城の他に、大淀川沿いに小規模な山城が点在しており、10 箇所以上（文献では 18 箇所）が確認されている。天ヶ城の麓に位置する高岡麓遺跡においても遺物が確認されているが、遺構からの出土遺物は僅かであり、当該期の様相



1．穆佐城跡　3．上新城遺跡　5．梅木田遺跡　7．宮水流遺跡　9．橋山第１遺跡
2．麓遺跡　4．三万田遺跡　6．学頭遺跡　8．八児遺跡　10．橋山第２遺跡

第１図 穆佐城跡周辺遺跡分布図　（S＝1/25,000）

は明らかではない。生産遺跡としては、丘陵南側の低地に立地する三万田遺跡、上新城遺跡、丘陵北側の低地に立地する梅木田遺跡で水田遺構が検出されている。これらは穆佐城存続時期にも営まれており、穆佐城を支える生産域であったと考えられる。また三万田遺跡においては、穆佐城開城以前である古代（９世紀後半から 10 世紀前半）の大溝による方形区画が確認されている。区画内の遺構と出土遺物の検討から、この区画内での居館の存在は否定されているが、隣接する位置に相当する施設があった可能性が示唆されている。穆佐城の前身を考える上で重要な遺構である。

参考文献

石村友規 2008 『史跡穆佐城跡』穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（Ⅲ）、宮崎市文化財調査報告書第 67 集、宮崎市教育委員会。

島田正浩 1995 「中世城館「穆佐城」について－東諸県郡高岡町所在－」『宮崎県史研究』第８号、宮崎県。

島田正浩 1995 『高岡町内遺跡』Ⅲ、高岡町埋蔵文化財調査報告書第８集、高岡町教育委員会。

島田正浩 2004 『穆佐城跡』穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（Ⅰ）、高岡町埋蔵文化財調査報告書第 33 集、高岡町教育委員会。

島田正浩 2005 『史跡穆佐城跡』穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（Ⅱ）、高岡町埋蔵文化財調査報告書第 38 集、高岡町教育委員会。

藤木晶子 2003 『梅木田遺跡』県営ふるさと農道緊急整備事業（小山田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３、高岡町埋蔵文化財調査報告書第 27 集、高岡町教育委員会。

藤木晶子 2005 『三万田遺跡』県営ふるさと農道緊急整備事業（小山田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７、高岡町埋蔵文化財調査報告書第 40 集、高岡町教育委員会。

藤木晶子 2005 『上新城遺跡』県営ふるさと農道緊急整備事業（小山田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書８、高岡町埋蔵文化財調査報告書第 41 集、高岡町教育委員会。

3　穆佐城の概要

穆佐城の歴史

穆佐城が最初に文献資料に現れるのは南北朝期の建武３年（1336）の『旧記雑録』建武３年２月７日「土持宣栄軍忠状」であり当時は足利氏の所領であった。その後建武４年４月 14 日には畠山直顕が「国大将」として派遣され穆佐城に入城し、興国６年（1345）９月には日向国守護職に任命されている。中央において観応の擾乱が起こると、日向国も抗争が表面化し穆佐城も争乱の舞台となった。正平 12 年（1357）、直顕は志布志松尾城の新納実久を攻めたが、鹿児島から来援した島津氏久に破れ穆佐城に退いた。その後、穆佐城は南朝方の菊池武光に攻められ直顕は没落していった。

室町時代の応永 10 年（1403）になると穆佐城を含む大淀川以南は島津元久が支配していた。元久は実弟である島津久豊を穆佐院などの守りとして派遣した。応永 18 年（1411）、元久が没すると、久豊は島津家第８代として相続した。しかし翌年伊東氏が大淀川以南に侵攻、穆佐城は西の城が陥落し、破れた島津方は末吉まで退いた。その後は再び島津氏が日向国に進出し、久豊の息子であり、穆佐城で誕生したとされる島津忠国が穆佐城の城主となるが、文安２年（1445）９月、土持氏と共に侵攻した伊東祐堯によって陥落、以後約 130 年間、穆佐城は伊東氏の支配下となった。

織豊期になり、天正５年（1577）に伊東氏が豊後国に退去すると、穆佐城は再び島津氏の支配下となった。近世になると穆佐は薩摩藩の外城（郷）の一つとなり、城郭としての役目を終え、支配の拠点は麓に移った。

穆佐城の地形

穆佐城の城域は大規模な堀切によって４つに区分できる。北東部に位置するＡ地区は、小規模な曲輪と堀切から構成される戦闘に特化した曲輪群である。その南西に接するＢ地区は、主郭と想定される曲輪７が存在する曲輪群で、穆佐城の政治的な中心部分と考えられる。Ｂ地区は曲輪を１ｍから５ｍの段差によって区画することを特徴とする。最上部に位置する曲輪７と、北隣に１段低く接する曲輪８は、西側の堀切Ⅱに対して大規模な土塁が巡らされており、両曲輪を併せて主郭と捉えられる。堀切Ⅱを挟んでＢ地区の西側に位置するＣ地区は、Ｂ地区と同様に曲輪が段差によって区画され、穆佐城の中で個々の曲輪の面積が最も広い。Ｂ地区とは堀切Ⅱによって分断されているため、城主の近親者というよりは上位階級の家臣の屋敷地であった可能性が高い。Ｃ地区の北西に位置するＤ地区は、一つの広い曲輪内に横堀を巡らせている。Ｄ地区もＡ地区と曲輪形態こそ違え、その立地から戦闘に備えて配された曲輪群と考えられる。

穆佐城は、この４つの曲輪群の一つ一つを巨大な曲輪として捉えると、大規模な堀切と広い曲輪で構成され、曲輪相互の独立性が高い「群郭型城郭」、「館屋敷型城郭」の一例であると言える。しかし、平成 19 年度の調査では、曲輪 20 において埋め戻された堀や段が確認されたことから、本来は曲輪を細分する堀や段が存在していた可能性があり、今後の調査成果によっては評価を再考する必要がある。穆佐城の場合、特にＢ地区おいては綿密に堀や段、虎口を配置し、曲輪相互の連携性が高度に保たれていた可能性が高い。

4　既往の調査

発掘調査は、平成２年に作成した縄張図の成果を基に過去 10 回（１～10 次）実施している。１次から６次調査は城郭の東半部、Ａ地区とＢ地区において実施した。

１次調査は曲輪 21 で盛土造成による平坦部の造作を確認した。２次調査では、主郭に隣接する曲輪 10 において柱穴等が検出され、14 世紀～16 世紀末の貿易陶磁器も出土している。３次調査は堀切の状況確認を目的にＡ地区とＢ地区間にある堀切Ｉの調査を行った。４次調査は曲輪 28 の通路状遺構と想定される土坑において階段状遺構を確認した。５次調査では曲輪５にお

いて多数のピット、溝を検出した。６次調査は曲輪 10 において虎口を、曲輪 17 において盛土造成による平坦部の造作を確認した。

平成 15 年度からは保存整備を目的に発掘調査を実施している。７次調査、８次調査は未調査であった C、D 地区の状況を確認する目的で行った。７次調査は C 地区にある曲輪 23 を対象とし、土坑、虎口を検出した。８次調査は C 地区の曲輪 22、23、24、26、D 地区の曲輪 27 を対象とした。曲輪 23 においては７次調査で確認された虎口の続きを、曲輪 27 では、曲輪内の段を検出した。

９次、10 次調査はB地区内に所在する島津忠国が誕生した「坪之城」と考えられている曲輪 20 を調査対象とした。その結果、人為的に埋められた堀、曲輪内の段が検出され、造成により曲輪を大きく改変しながら利用していたことが明らかとなった。

第Ⅱ章　調査区の設定と調査の概要

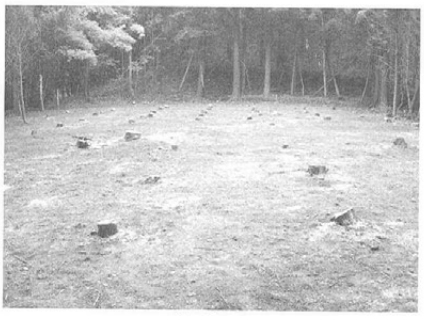
1　調査位置と目的

調査対象とした曲輪７は、B 地区の中でも最高所に所在し、曲輪８と共に西側を大規模な土塁と堀切によって守られ、主郭に相応しい防御機能を有している。この曲輪７は戦国期を中心とする遺構の存在が期待され、今後保存整備を行う上で重要な位置を占めるため、その時期や遺構の展開、残存状況を確認するために発掘調査を行うことにした。

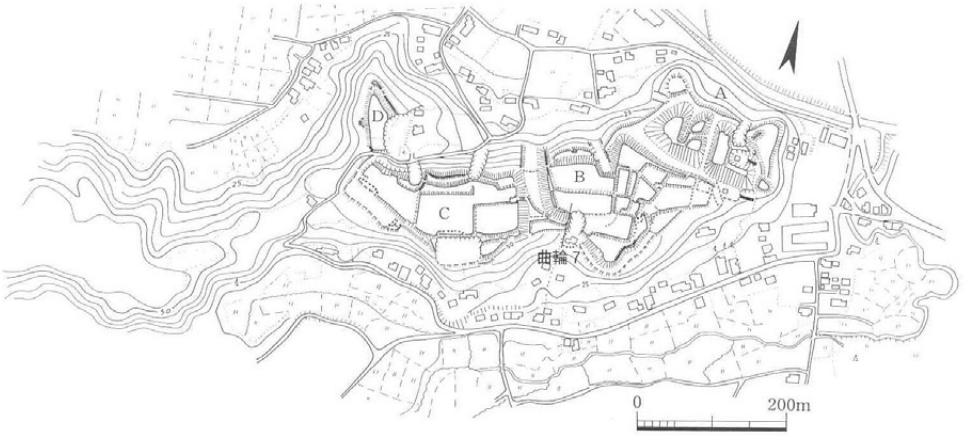
平成 20 年度（11 次）は、曲輪７が現地形において中央から東側が西から東へ向かって下降傾斜していることから、東半は後世に削平を受けている可能性が高いと判断し、曲輪７の西半を中心に調査区を設定、東半は３本のトレンチによって遺構の残存状況を確認する方針で調査を実施した。また西端の土塁についても造作方法や残存状況の確認を行い、整備に活用するためトレンチによって調査を行うことにした。

平成 21 年度は前年度の調査結果を受け、想定よりも遺構の残存状況が良好であった曲輪の東半について面調査を行うことにした。虎口に関しては平成 20 年度の調査において確認できなかった東西方向の通路部分等の全容を確認するために調査区を設定した。

曲輪７
－調査前状況－



曲輪７
－伐採後状況 20年度－



第２図 穆佐城跡縄張り図　（千田嘉博氏原図）

2　基本層序

曲輪７の土層堆積状況は、基本的に東西方向で大きく異なることはない。しかし、本来は西から東へ向かって緩やかに下降傾斜する地形を削平して曲輪を造作しているため、遺構面となる地山が地点によって異なるという状況になっている。その基本層序を以下で示すが、この層序は現在までのところ曲輪７に限定されるものであり、穆佐城跡全体を網羅するものではない。また土色に関しては、模式図ということで人間の視覚のみによる大系的な名称を与えているため、土色帳を用いて細分した土層断面図の土色とは必ずしも一致しない。

自然堆積

Ⅰ層：黒色土。５mm 大のパミスを多量に含む。曲輪 20 で中世遺構面となっていた造成土に類似する。土塁断面で確認された。

Ⅱ層：アカホヤ火山灰層。確認できる場所、層厚共に僅かである。二次堆積なのか色調が暗くくすんでいる。

Ⅲ層：黒褐色ローム層。曲輪７東側、土塁で確認された。

Ⅳ層：灰褐色ローム層で小林軽石を含む。

Ⅴ層：橙褐色ローム層。

Ⅵ層：姶良Ｔｎ火山灰層。西側調査区の主要遺構検出面。

Ⅶ層：姶良入戸火砕流（シラス）層。曲輪７では上層から黄色、ピンク、白色へと変化する。

人為堆積

１層：表土。

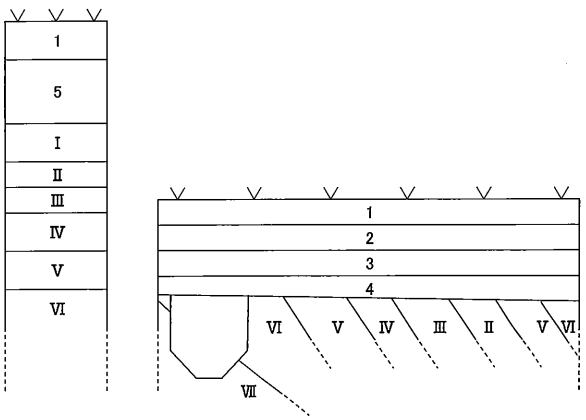
２層：現代造成土で、表土と色調、質感共に類似する。

３層：造成土。灰褐色を呈し、中世から近世の遺物を含む。撹乱が掘り込まれる層である。

４層：包含層。地山ブロックが混ざり、中世の遺物を包含する。

５層：土塁盛土層。褐色を呈し樹根の影響か締まりはそれほど強くない。

曲輪７が所在する場所は、穆佐城が開城する以前は西から東に向かって下降傾斜する地形であったが、曲輪７を造作する時に、西端の土塁を残して削平し、平坦面を形成、生活面として活用したとみられる。しかし西側を中心に削平したものの東西での高低差は約 2.3m残されており、東側の遺構残存状況から鑑みると、東側は整地のための削平は行ったが、大規模な盛土は行っておらず、当時の遺構面の高低差を反映している可能性が高い。

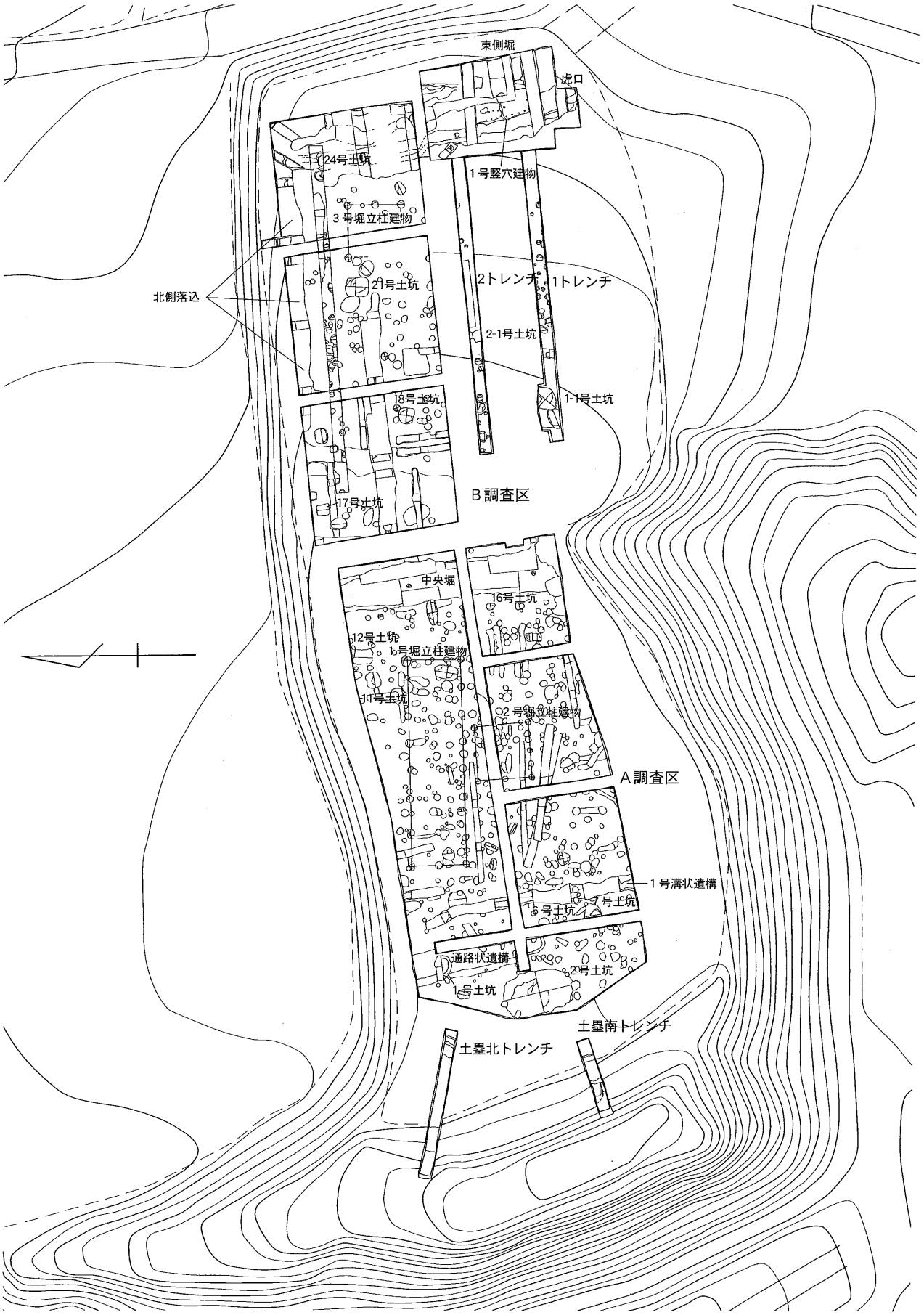


第３図 曲輪７土層堆積基本層序模式図

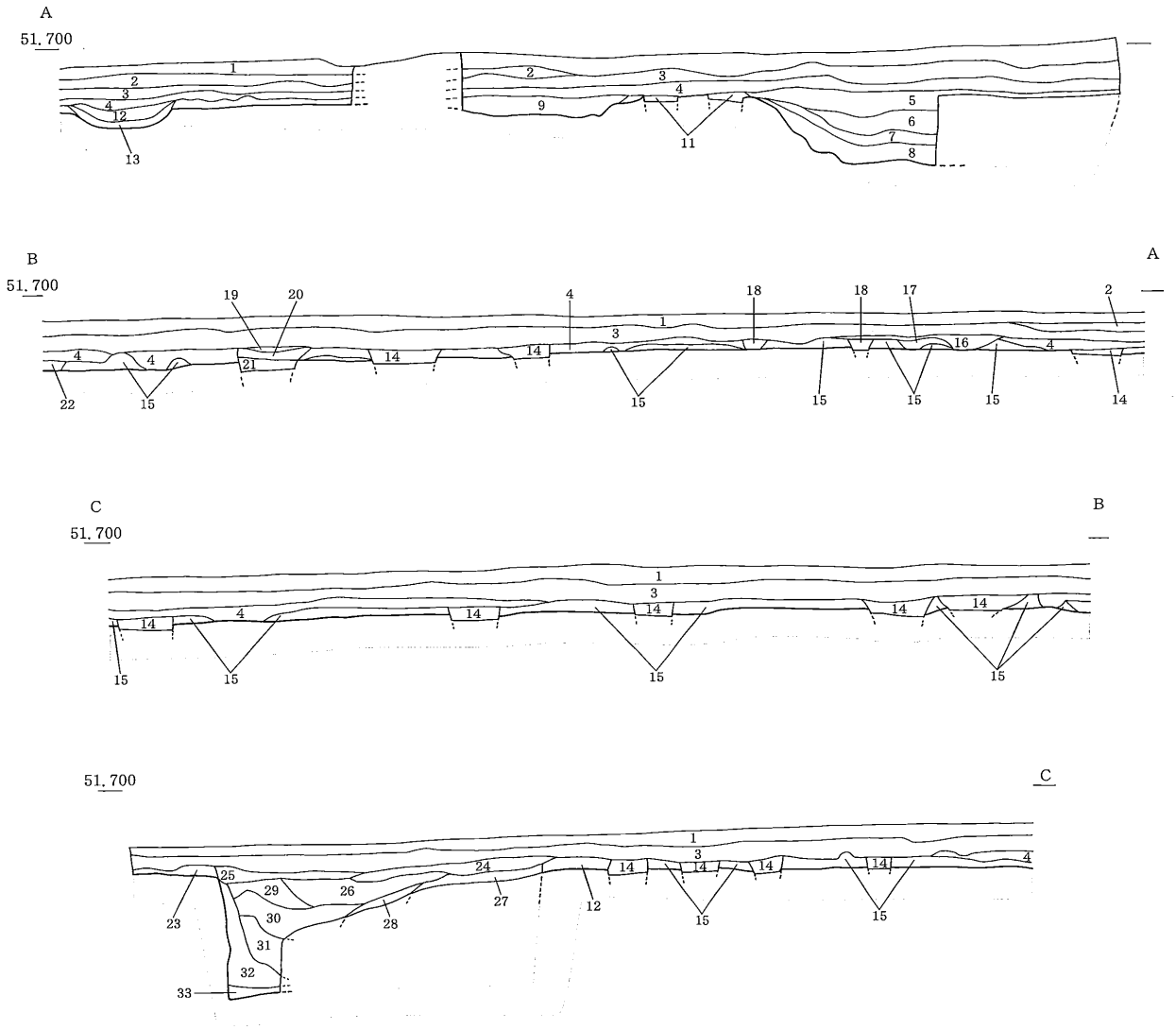
3　調査の概要

平成 20 年度（第 11 次）調査

現地における調査は、まず曲輪の東半部に南から１トレンチ、２トレンチ、３トレンチを設定し、遺構の残存状況の確認を行った。その結果、遺構面の上部は削平を受けていると思われるが、遺構は完全に削平されておらず、比較的良好な状況で検出された。１トレンチ東端では、遺構面が段になる状況が確認されたため拡張を行ったところ、虎口と想定される遺構が検出された。さらに虎口通路部分の脇では竪穴建物と考えられる遺構が確認され、詰所のような施設を付随した虎口であると想定された。



第4図 曲輪7発掘調査区位置図　（S＝1/400）



	色調		硬度	粘性	備考
1	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	表土
2	10YR4/4	褐	締まりやや強い	やや弱い	
3	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや強い	やや弱い	畑時の表土か
4	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	炭化物含む
5	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック僅かに含む　2号土坑埋土
6	10YR3/4	暗褐	締まりやや強い	やや弱い	ATブロック僅かに含む　2号土坑埋土
7	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや強い	やや弱い	遺物を含む　2号土坑埋土
8	10YR3/3	暗褐	締まりやや強い	やや弱い	ATブロック僅かに含む　2号土坑埋土
9	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック僅かに含む　通路状遺構埋土
10	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック多量に含む　通路状遺構埋土
11	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	ピット埋土
12	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATを少量含む　パミスを僅かに含む
13	10YR4/4	褐	締まり弱い	弱い	ATを多量に含む
14	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック含む　ピット埋土
15	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT・シラス含む　遺物包含
16	10YR4/4	褐	締まりやや強い	やや弱い	炭化物を僅かに含む
17	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATを含む
18	10YR4/6	褐	締まりやや弱い	やや弱い	炭化物・ATブロック含む
19	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	
20	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ピット埋土
21	10YR3/4	暗褐	締まり弱い	やや弱い	ピット埋土　炭化物多く含む
22	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	遺物包含
23	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	橙褐色ローム　遺物包含
24	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	橙褐色ローム・ATブロック含む　中央堀埋土
25	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック（2cm以下）・炭化物少量含む　中央堀埋土
26	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	橙褐色ローム・ATブロック多量に含む　中央堀埋土
27	10YR4/6	褐	締まりやや強い	やや強い	橙褐色ロームによる造成土　中央堀埋土
28	10YR3/3	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	炭化物含む　中央堀埋土
29	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT・炭化物少量含む　中央堀埋土
30	10YR4/6	褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック多量に含む　中央堀埋土
31	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック（3cm以下）含む　炭化物少量含む　中央堀埋土
32	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	橙褐色ロームブロック多量に含む　中央堀埋土
33	10YR4/6	褐	締まりやや弱い	やや弱い	橙褐色ロームによる造成土

0　3m

第5図 A調査区東西セクション土層断面図　（S＝1/60）

曲輪西半では、調査区の中央北寄りにおいて掘立柱建物が検出された。幾度も建て替えが行われており、多くのピットが検出された。その中で柱痕部分が炭化したものと、それに平行して尚且つ切り合わない２棟の建物のピットを半裁し、土層堆積状況を確認した。

掘立柱建物が分布する地区の東側からは、曲輪を東西に分断する南北方向の箱堀が検出された。箱堀の床面は硬化面になっており、北隣に位置する曲輪８から続く通路としても使用されていたと考えられる。また、この箱堀は、土層の堆積状況と出土した遺物から穆佐城が城として機能している時期に埋め戻されていた。

掘立柱建物の西側でも溝状の通路遺構が確認できた。これも曲輪８と結ばれた通路と考えられるが、中心建物の「奥」という配置から裏口のようなものであったと思われる。

この裏口通路のさらに西側には、曲輪７、８を併せて守る土塁が築かれている。この土塁の構築方法を明らかにするため、トレンチを２本設定し、土層の堆積状況等を確認した。その結果、土塁は地山を削りだし、その上に僅かに盛土を行い構築されていることが確認された。

平成 21 年度（第 12 次）調査

平成 21 年度の調査は、曲輪東半部に面調査区を設定し調査を開始した。ピットは複数検出されたものの、伐採した樹木の根の多くが遺構面に達していたため樹根を残したことに加え、畑時の多数の撹乱溝により検出が大きく制約され、掘立柱建物は可能性として１棟の検出に止まった。

調査区の北側は一部が造成土によって遺構面が構成されている。造成土は平成 20 年度調査で土塁において確認された多量のパミスを含む黒色土を基本とし、炭化物や土器片を少量含む。さらに北端は遺構面が一段下がり、その形状、位置から虎口と結ばれる通路と想定される。

調査区の東端では北端から南端まで堀が検出された。この堀は土層堆積状況から一時期に埋め戻され曲輪が拡張されていることが明らかとなった。埋め戻された上部では硬化面も検出され、埋め戻した後にその上部を活用していたと考えられる。また埋め戻しが行われる前に、曲輪端の肩部が崩落しているとみられ、残存する旧曲輪肩ぎりぎりの位置において、東側が欠落した土坑が検出された。

調査区の東南部では、平成 20 年度調査で検出した虎口周辺を拡張して調査を行った。20 年度調査では検出できなかった虎口屈曲部は検出されたが、東西通路部分については直径が 50cm を超える杉群下に延びており、樹根の影響が大きく成果が期待できないことから検出を断念した。屈曲部付近通路上では礫群が検出された。通路廃棄時に礫壁を構築した可能性も考えられるが、積み方は粗雑で転落した状況の礫が多数検出された。

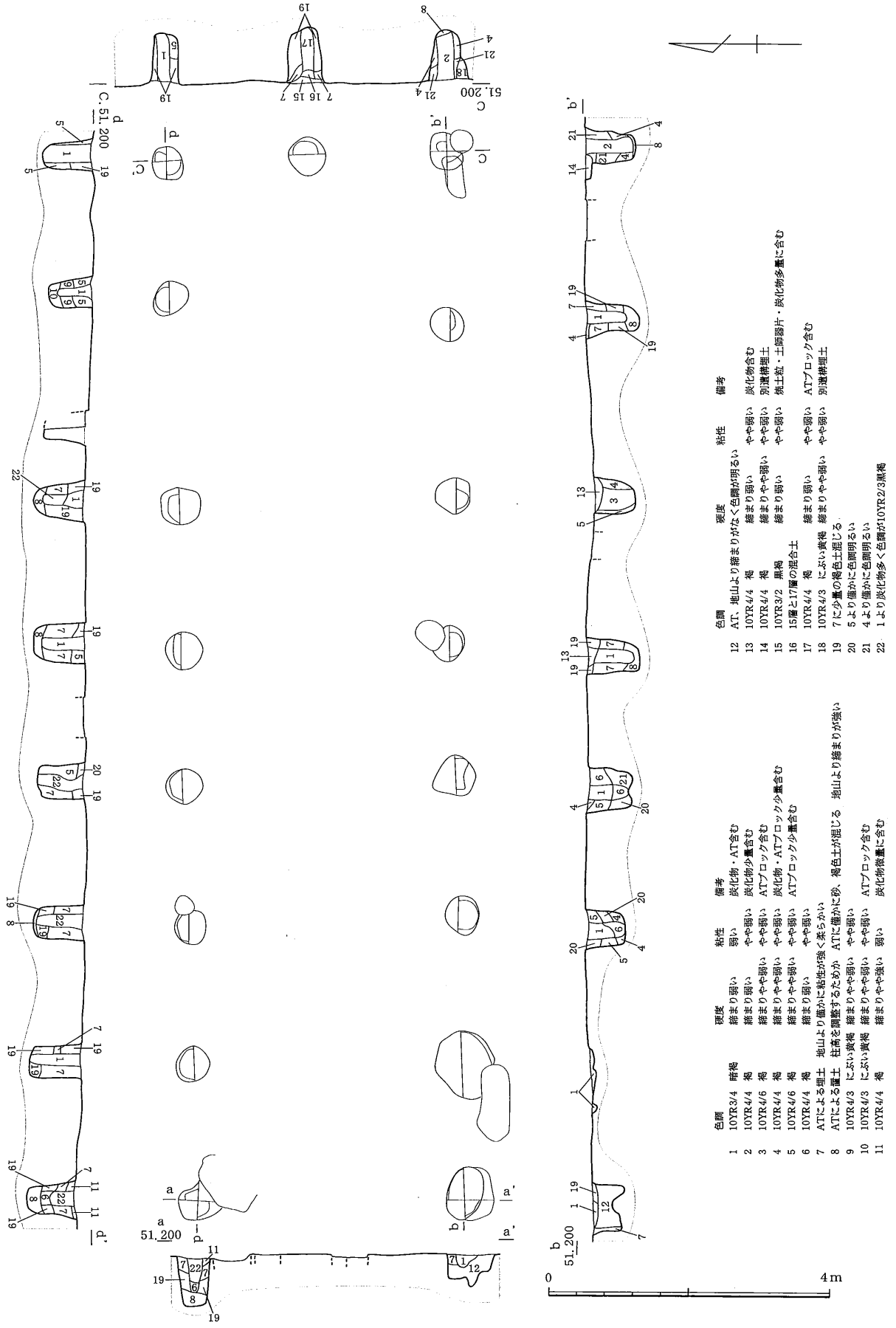
第Ⅲ章　調査成果

１　主要遺構

７Ａ調査区

７Ａ調査区では、掘立柱建物２棟、土坑 13 基、溝状遺構１条、通路状遺構１条、箱堀１条、ピット６基を断ち割り、土層堆積状況の調査を行った。

１号掘立柱建物　調査区中央北よりで検出された７間×２間の大形の掘立柱建物である。桁行約 15m、梁行約４ｍを測り、桁行をほぼ東西方向に向ける。柱穴は平均直径 50cm 前後、深さは柱材の長さを調節するためか差が見られるが 70cm 前後のものが多い。柱痕部分が明瞭に確認できるものが多く、すべての柱痕で炭化物が見られ、10cm 前後の炭化材が残存しているものもあった。民俗事例で柱の腐食を抑えるために表面を炭化させる事例も存在するが、柱痕から出土した炭化材は木芯付近と見られるものがあり、完全に柱が炭化していたと考えられることから柱が立てられた状態で被熱した可能性が高い。その規模から曲輪７の中心建物と考えられる。



	色調	硬度	粘性	備考
1	10YR3/4 暗褐	締まり弱い	弱い	炭化物・AT含む
2	10YR4/4 褐	締まり弱い	やや弱い	炭化物少量含む
3	10YR4/6 褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック含む
4	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや弱い	炭化物・ATブロック少量含む
5	10YR4/6 褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック少量含む
6	10YR4/4 褐	締まり弱い	やや弱い	
7	ATによる埋土	地山より僅かに粘性が強く柔らかい		
8	ATによる埋土	柱痕を調整するためか	ATに僅かに砂、褐色土が混じる	地山より締まりが強い
9	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	
10	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック含む
11	10YR4/4 褐	締まりやや強い	弱い	炭化物微量に含む
12	AT、地山より締まりがなく色調が明るい			
13	10YR4/4 褐	締まり弱い	やや弱い	炭化物含む
14	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや弱い	別遺構埋土
15	10YR3/2 黒褐	締まり弱い	やや弱い	焼土粒・土師器片・炭化物多量に含む
16	15層と17層の混合土			
17	10YR4/4 褐	締まり弱い	やや弱い	ATブロック含む
18	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	別遺構埋土
19	7に少量の褐色土混じる			
20	5より僅かに色調明るい			
21	4より僅かに色調明るい			
22	1より炭化物多く色調が10YR2/3黒褐			

第6図 1号堀立柱建物実測図　（S＝1/80）

２号掘立柱建物　１号掘立柱建物の南に隣接して検出された２間×２間の掘立柱建物である。桁行、梁行共に約４ｍで、建物の方向は１号掘立柱建物に平行する。このことから１号掘立柱建物に付随する建物の可能性が想定されるが、１号建物ほど柱痕の炭化は著しくない。柱穴は直径 40cm 前後、深さは 30～80cm 前後とばらつきが大きい。東西方向の中央２柱穴から根石が検出された。

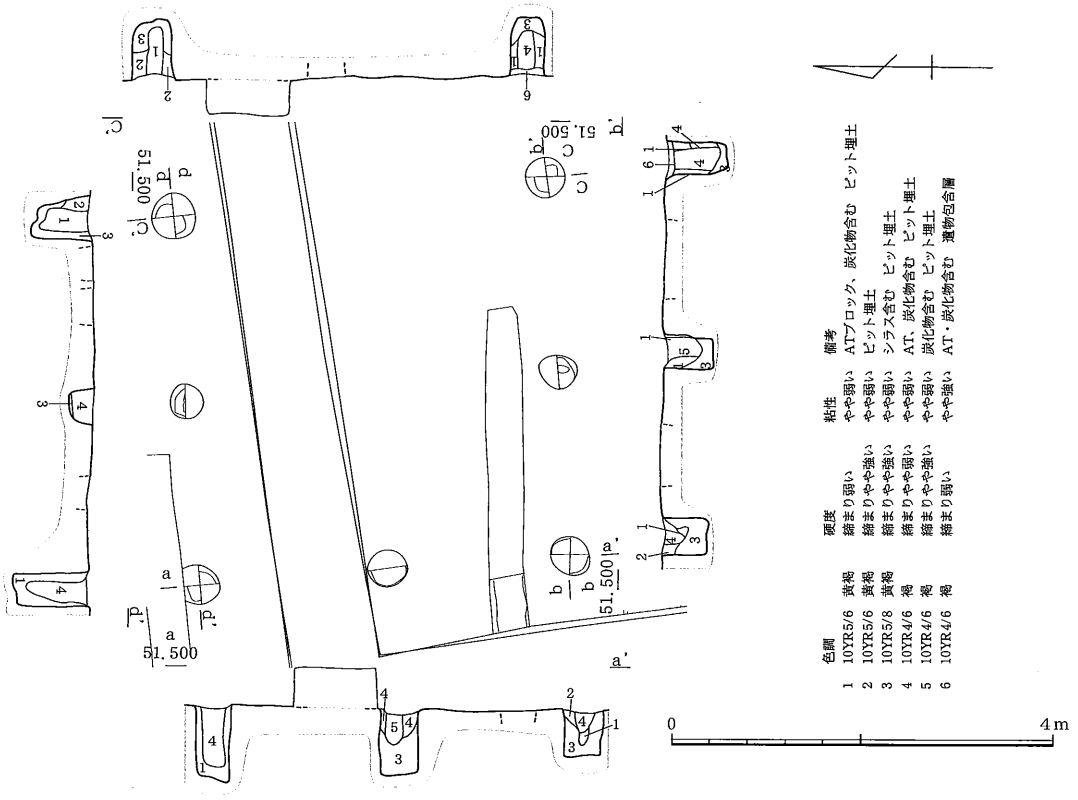
１号土坑　調査区の北西で検出されたが、上面を通路状遺構によって削平されていた。平面形は楕円形を呈し、長軸 1.3m、深さ 0.85ｍを測り、壁面は穆佐城跡でよくみられるほぼ垂直に立ち上がるタイプの土坑である。

２号土坑　調査区の西端で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸 5.4m、短軸３ｍ、深さ 0.9ｍを測る大形の土坑である。土層の堆積は凹レンズ状を呈し、出土する遺物も少なく、有機質も見られないことからゴミ穴等の特別な用途は考え難く性格は不明である。遺物は龍泉窯系青磁椀、備前焼擂鉢、備前焼壺、青花、青釉磁器（交趾焼）皿、土師器小皿が出土した。

６号土坑　平面形は楕円形を呈し、直径 0.55m、深さは 1.45m以上である。土層の堆積は水平に近い堆積状況を示し、壁面はほぼ垂直である。規模は６号土坑より大形であるが、円筒もしくは隅丸方形の筒状に深く掘り込まれる形態は 11 号土坑、12 号土坑に類似する。平成 19 年度に調査を行った曲輪 20 においても類似する土坑が確認されている（土坑１－６）。

７号土坑　６号土坑に近接する位置で検出された。平面形は歪な円形で、直径 1.2m、深さ 1.15ｍを測り、北側の肩口はキャリパー状に開く。床面付近では白色のシラスが面を成しており、意図的に敷設した可能性も考えられるが、埋葬等を行った痕跡は確認できなかった。

11 号土坑　調査区の北東部で検出された。平面形は歪な円形を呈し、直径 1.15m、深さ 2.35ｍを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、全体の形状は円筒状を呈する。土層の堆積は土坑床面に木箱を設置して上部を埋め戻し、後に木箱が腐食してＵ字状に陥没したと考えられる状況が確認された。ただし精査を行ったが木箱の木質が置き換わった土層は確認できなかった。



第７図 ２号堀立柱建物実測図　（S＝1/80）

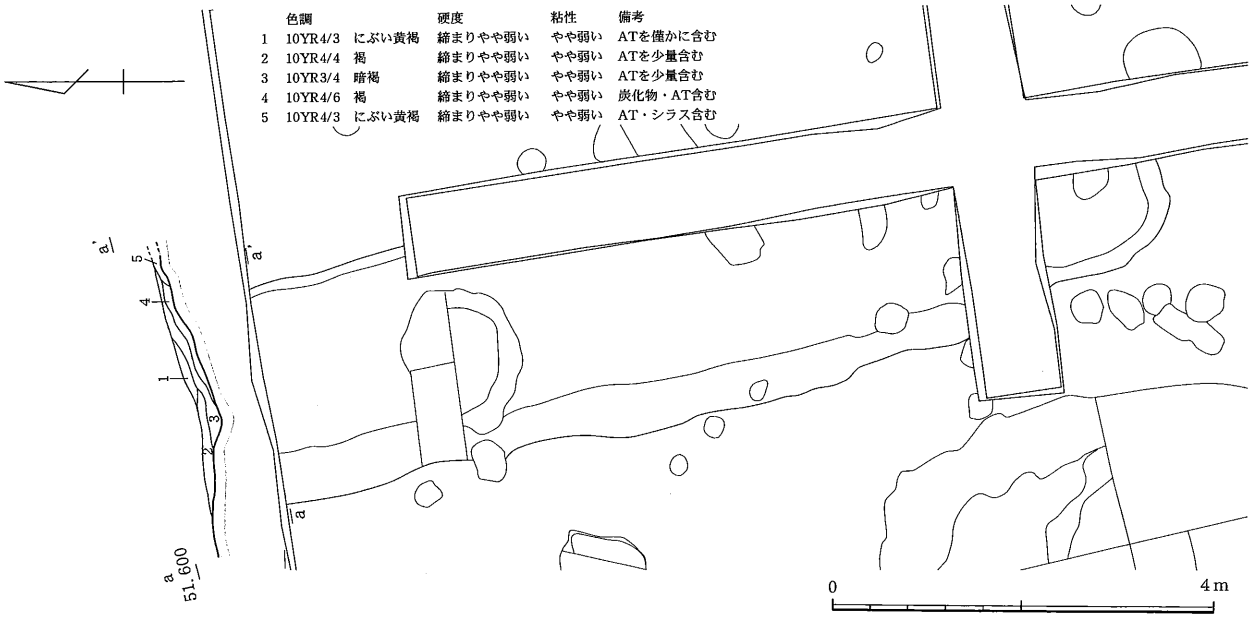
12 号土坑　11 号土坑に隣接する位置で検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸 1.3m、深さは 2.5mまで掘削を行ったが床面は検出されず、以下の掘削は危険が伴うため断念した。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、縦断面は６号土坑、11 号土坑に類似する。ただし 11 号土坑とは異なり土層の堆積は凹レンズ状を呈するため、木箱等の構造物は土坑内に設置されていなかったと見られる。隣接する位置に２基の類似する土坑が掘削されているが、土層の堆積状況から見ると両者の性格は異なるようである。

16 号土坑　調査区の中央東で検出された。平面形は歪な楕円形を呈しており長軸 0.38m、短軸 0.17mを測る。土坑の西壁は熱を受けて赤化している。小規模な土坑であるため通常は壁全面が被熱により赤化するはずであるが、東壁は全く赤化しておらず何らかの工具などを土坑に設置して火を使った可能性がある。

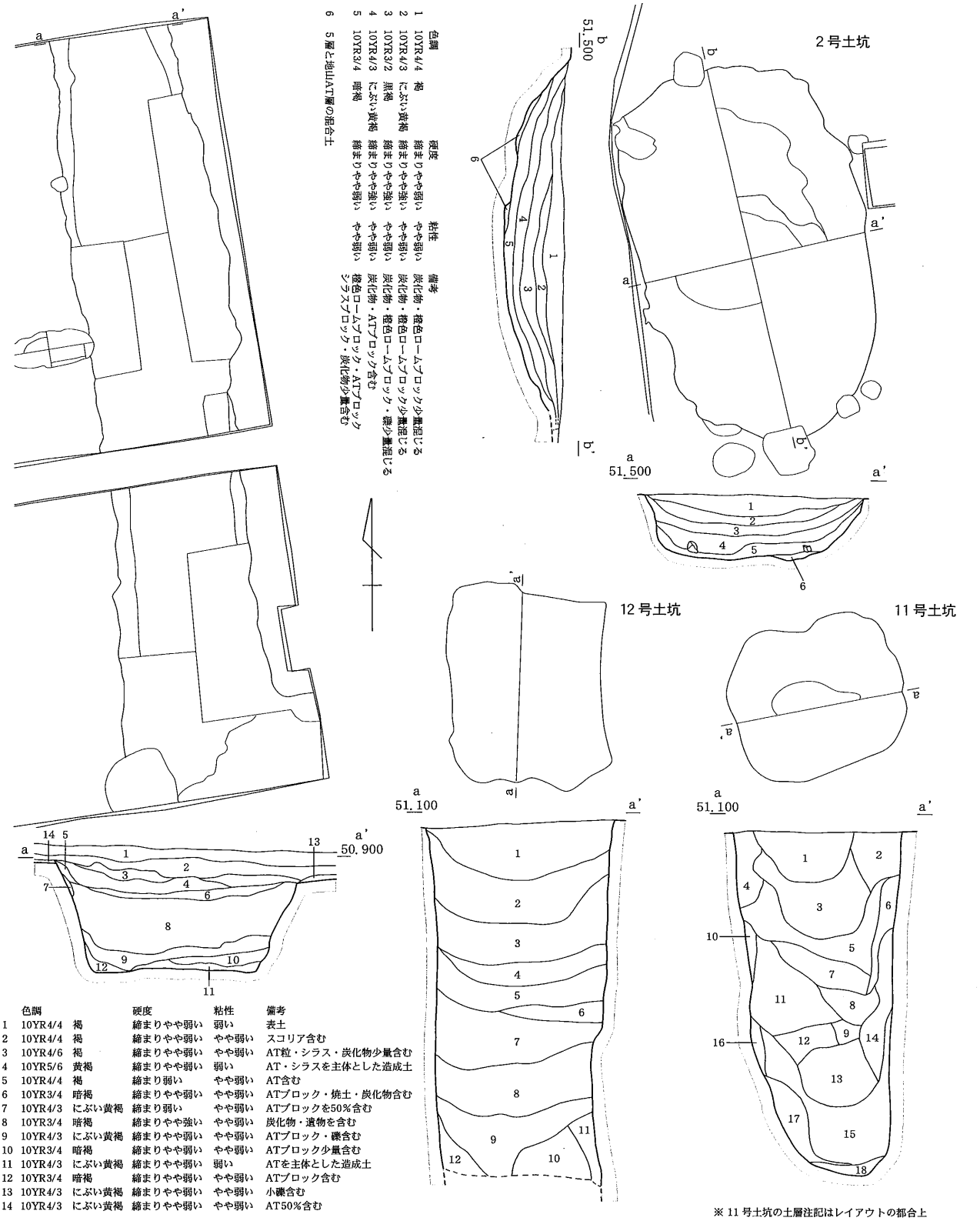
１号溝状遺構　調査区の西寄りで南北方向に検出された。幅は１～２ｍで、深さは最も深いところでも 0.3mに満たない程度である。北端は緩やかに浅くなりそのまま溝が途切れる。その位置と底面が傾斜している状況から区画兼排水溝と想定される。

通路状遺構　１号溝状遺構の西、２号土坑との間に位置し、南北方向に検出された。北から南に進むにしたがってスロープ状に浅くなり、調査区のほぼ中央で途切れる形となる。床面がＡＴのため明確な硬化面は検出されなかったが、通常の遺構面として検出されるＡＴと比較すると若干硬度が高い。曲輪７と曲輪８を結ぶ通路と考えられるが、曲輪７の全体配置から見ると、掘立柱建物、区画溝の「奥」に位置することから、通用口のような用途であったと考えられる。

中央堀　調査区の東端で検出され、曲輪全体でみるとほぼ中央に位置する。幅は 2.9～3.2m、深さ１ｍ前後、壁面の角度は 70～80° を測り、断面形状は逆台形を呈し箱堀となる。曲輪を東西に分断する形で南北方向に掘削されており、この堀を境に東側が「表」、西側が「奥」として機能分化していたと考えられる。底面からは硬化面が検出され通路としても使用されたことがわかる。この通路も曲輪７と曲輪８を結ぶものであり、西側で検出された通路状遺構とは使い分けが成されていた可能性が高い。箱堀は掘立柱建物の東側に位置し、曲輪東半の中で見ると「表」側に所在するため、城主や近親者が通常曲輪８との行き来に使用したものと想定できる。土層の堆積状況と出土した遺物から穆佐城が城として機能している時期に埋め戻されており、おそらく生活の利便性のためと想定されるが、防御機能の一部である箱堀を埋め戻し、１区画の平坦面に造り変え、生活空間として利用していたことが明らかになった。



第８図 通路状遺構実測図　（Ｓ＝1/80）



	色調		硬度	粘性	備考
1	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	炭化物・橙色ロームブロック少量混じる
2	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや強い	やや弱い	炭化物・橙色ロームブロック少量混じる
3	10YR3/2	黒褐	締まりやや強い	やや弱い	炭化物・橙色ロームブロック・礫少量混じる
4	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや強い	やや弱い	炭化物・ATブロック含む
5	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	橙色ロームブロック・ATブロック シラスブロック・炭化物少量含む
6	5層と地山AT層の混合土				

	色調		硬度	粘性	備考
1	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	弱い	表土
2	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	スコリア含む
3	10YR4/6	褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT粒・シラス・炭化物少量含む
4	10YR5/6	黄褐	締まりやや弱い	弱い	AT・シラスを主体とした造成土
5	10YR4/4	褐	締まり弱い	やや弱い	AT含む
6	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック・焼土・炭化物含む
7	10YR4/3	にぶい黄褐	締まり弱い	やや弱い	ATブロックを50%含む
8	10YR3/4	暗褐	締まりやや強い	やや弱い	炭化物・遺物を含む
9	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック・礫含む
10	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック少量含む
11	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	弱い	ATを主体とした造成土
12	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック含む
13	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	小礫含む
14	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT50%含む

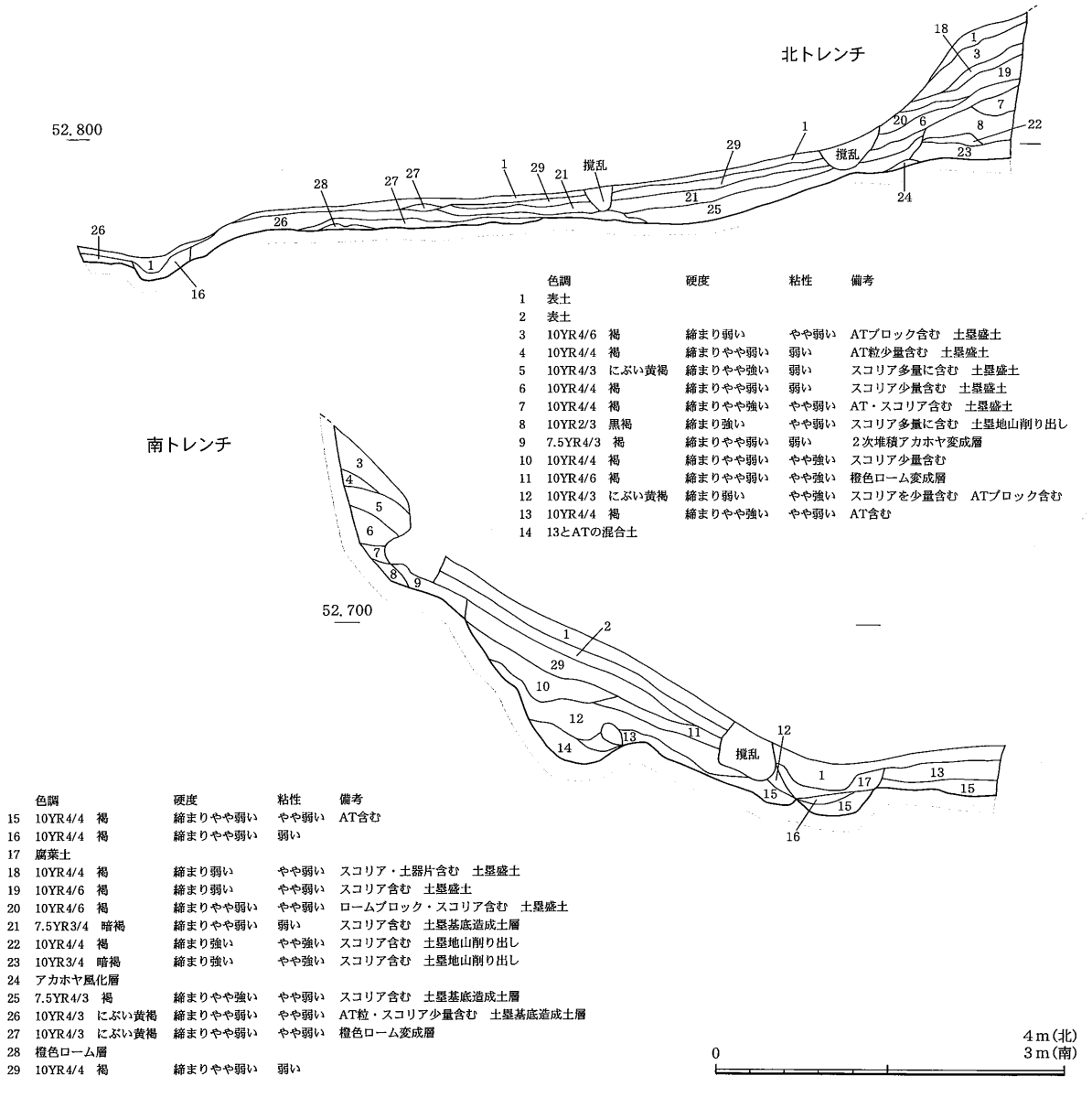
※11号土坑の土層注記はレイアウトの都合上
P16に記載しています。

	色調		硬度	粘性	備考
1	10YR4/4	褐	締まりやや強い	やや弱い	炭化物・ATブロック含む
2	10YR4/6	褐	締まりやや弱い	やや弱い	炭化物・ATブロック含む
3	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	下面に炭化物がやや多く見られる　礫含む
4	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATを多く含む
5	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや強い	炭化物・ATブロック含む
6	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや強い	ATブロック含む
7	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや強い	炭化物・ATブロック含む
8	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック多く含む　シラス含む
9	10YR4/4	褐	締まりやや強い	やや弱い	ATブロック・炭化物・シラス含む
10	白色シラス		締まりやや弱い	無	
11	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック・炭化物含む
12	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT・ピンクシラス・白色シラス含む

6m(堀平)
3m(堀断)
4m(2号)
2m(11・12号)
0

第9図 中央堀・土坑実測図　(堀平面 S＝1/120,　堀断面 S＝1/60,　2号土坑 S＝1/80,　11・12号 S＝1/40)

土塁　南北２本のトレンチを設定し、土層の堆積状況の確認を行った。北トレンチは曲輪の北西で確認される段の構築状況も同時に確認できるようにトレンチの設定を行っている。土層観察の結果、南北トレンチ共に地山を削り出し、その上に若干の盛土を施し土塁を構築している状況が確認された。最上位の地山は８層で、黒色のスコリアを含む。緩やかに東に向かって下降傾斜している状況が見て取れる。この土は曲輪 20 で造成土として確認された霧島御鉢高原スコリアを含む土に類似するが、炭化物など不純物を含まない。８層より上位の層は締まりが弱く複数種の土が混ざった様相であったため盛土を行った状況と判断した。北トレンチで確認した段は、当初後世の盛土による構築と想定していたが、地山を削り出して構築しており、さらに上位堆積土に関しても撹乱を受けている状況は確認されなかったため、この段も穆佐城期に構築されたものと判断した。またこの段の収束位置には小溝が設けられているが、堆積状況から後世に掘削されたものとみられる。



	色調	硬度	粘性	備考
1	表土			
2	表土			
3	10YR4/6 褐	締まり弱い	やや弱い	ATブロック含む　土塁盛土
4	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	弱い	AT粒少量含む　土塁盛土
5	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや強い	弱い	スコリア多量に含む　土塁盛土
6	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	弱い	スコリア少量含む　土塁盛土
7	10YR4/4 褐	締まりやや強い	やや弱い	AT・スコリア含む　土塁盛土
8	10YR2/3 黒褐	締まり強い	やや弱い	スコリア多量に含む　土塁地山削り出し
9	7.5YR4/3 褐	締まりやや弱い	弱い	２次堆積アカホヤ変成層
10	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや強い	スコリア少量含む
11	10YR4/6 褐	締まりやや弱い	やや強い	橙色ローム変成層
12	10YR4/3 にぶい黄褐	締まり弱い	やや強い	スコリアを少量含む　ATブロック含む
13	10YR4/4 褐	締まりやや強い	やや弱い	AT含む
14	13とATの混合土			
15	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT含む
16	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	弱い	
17	腐葉土			
18	10YR4/4 褐	締まり弱い	やや弱い	スコリア・土器片含む　土塁盛土
19	10YR4/6 褐	締まり弱い	やや弱い	スコリア含む　土塁盛土
20	10YR4/6 褐	締まりやや弱い	やや弱い	ロームブロック・スコリア含む　土塁盛土
21	7.5YR3/4 暗褐	締まりやや弱い	弱い	スコリア含む　土塁基底造成土層
22	10YR4/4 褐	締まり強い	やや強い	スコリア含む　土塁地山削り出し
23	10YR3/4 暗褐	締まり強い	やや強い	スコリア含む　土塁地山削り出し
24	アカホヤ風化層			
25	7.5YR4/3 褐	締まりやや強い	やや弱い	スコリア含む　土塁基底造成土層
26	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT粒・スコリア少量含む　土塁基底造成土層
27	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	橙色ローム変成層
28	橙色ローム層			
29	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	弱い	

第10図 土塁土層堆積状況実測図　（北トレンチＳ＝1/80，南トレンチＳ＝1/60）

７Ｂ調査区

７Ｂ調査区では、掘立柱建物１棟、土坑８基、通路状遺構１条、虎口、東端落ち込み、北端落ち込みを断ち割り、土層堆積状況の調査を行った。

３号掘立柱建物　２間×１間の掘立柱建物と想定される。調査を行った柱穴以外は樹根があり検出できなかった。調査区外に桁行が１間伸びる可能性もある。柱穴は直径 50cm 前後、深さ 30cm 前後で概ね揃っている。

17 号土坑　Ｂ調査区の北西で検出された。長軸約 0.9m、短軸約 0.8m、深さ約３ｍを測る。11 号、12 号土坑と類似する形態の土坑で曲輪北寄りに位置する点も同様である。遺物は検出面から 50cm 程度で土師器片が１点出土したが、それより下層では全く出土しなかった。また３層以下は土坑が狭く分層が不可能であった。

18 号土坑　一辺約 1.1m、深さ 0.4mを測る平面隅丸方形の土坑である。埋土内からブロック状の炭化米が多量に検出された。また鉄鎌が炭化米下部から出土したことから祭祀土坑の可能性も想定される。遺物は他に 15 世紀後半から 16 世紀初め頃の備前焼壺片が出土した。炭化米はＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を行ったが、結果は 265±20 年 BP（1635～1665 年）という値であり、出土遺物の年代とは齟齬が生じた。備前焼壺は大形ではあるが破片であり混入の可能性が高いが、17 世紀中頃という年代にはもう一つの問題がある。それは穆佐城が 17 世紀初頭には廃城になっているということである。薩摩藩では廃城後も城を定期的に管理していたという指摘があり、事実穆佐城跡でも近世段階の遺物が包含層から出土することはあるが、廃城後の主郭で祭祀を行うかという点については疑問が残る。今後類例の集成を行い検討の必要性がある事例であろう。

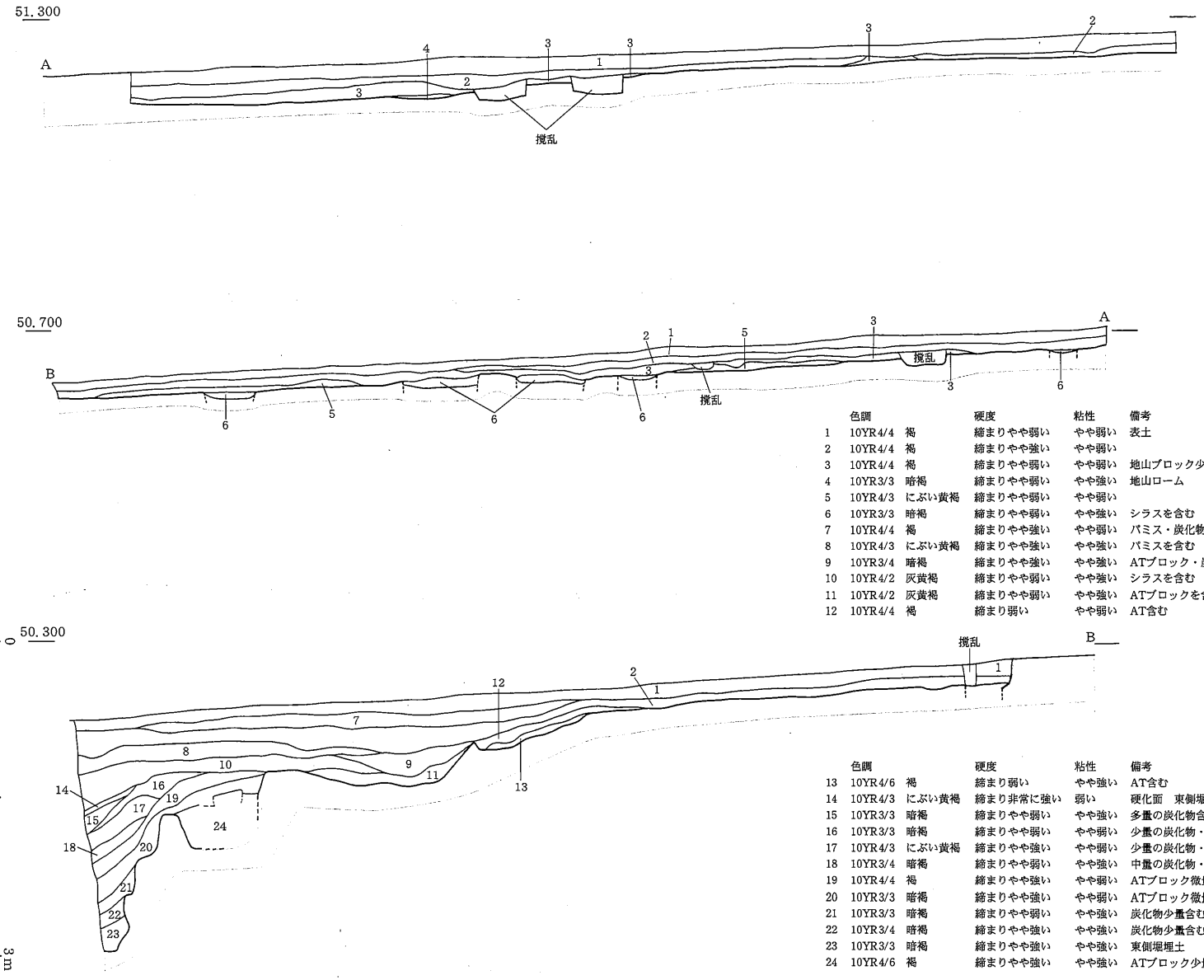
21 号土坑　長軸 1.7m、短軸 1.4m、深さ 1.7mを測る平面隅丸長方形の土坑である。上位層において多量の地山ブロックを含む層が検出されたことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。形態的には井戸のように思えるが、底面はＡＴであり湧水する状況ではなく、また貯水できる状況でもなく水場関係の遺構ではないと思われる。

24 号土坑（３トレンチ４号土坑）　上部が虎口から延びる通路状遺構により削平されている。平面形は長軸約 1.2mの楕円形と想定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さは残存部で約 1.1mである。上層からほぼ完形の土師器小皿が出土した。

通路状遺構（虎口）　東西方向部分は未検出であるが、検出された屈曲部や周辺地形からみると、ほぼ東から入り、約 90° 右手に屈曲し北へ進む構造と考えられる。屈曲部付近は曲輪面と約 80cm 程度の比高差が設けられているが、北に進むにしたがってこの差は解消される構造になっている。防御をより強固にする柵列等は段上から検出されていない。明確な硬化面は形成されていないが、これは床面がＡＴであることと、詳しくは後述するが使用期間が短期間であったためと思われる。虎口は廃棄時に埋め戻された状況であり、屈曲部からは礫が集中して検出された。廃棄時に礫を積み上げ低い壁を構築していたようであるが、積み方は粗雑で多くの礫は転落した状況で検出された。

北側落込み　調査区の北端で検出された落込みである。曲輪北東部で確認されるスコリアを多量に含む黒色土（包含層兼遺構面）上から掘り込まれ、床面はほぼ平坦である。曲輪８に向かって拡張したトレンチにおいては、北側にさらに一段下がった位置に再び平坦面が設けられていた。下段の平坦面の上がり際には排水溝と見られる小溝が設けられている。上段は虎口から続く通路と接続しており、この北側落込みも含め一連の遺構と捉えられる。虎口を経て北に進んできた通路がほぼ 90° 左に屈曲し、西へと進む構造である。接続部では深さが約 60cm 程度であるが、西に進むにつれスロープ状に浅くなり、曲輪の３分の１程度進んだ位置で曲輪面と同一レベルとなる。

東側堀　曲輪の東端付近で検出された。曲輪の端に近い位置であったため、当初は旧曲輪の西側の肩で、造成によりここより東を拡張したと考えていたが、サブトレンチ内で東側の立ち上



	色調		硬度	粘性	備考
1	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	表土
2	10YR4/4	褐	締まりやや強い	やや弱い	
3	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	地山ブロック少量含む
4	10YR3/3	暗褐	締まりやや弱い	やや強い	地山ローム
5	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	
6	10YR3/3	暗褐	締まりやや弱い	やや強い	シラスを含む
7	10YR4/4	褐	締まりやや強い	やや弱い	パミス・炭化物少量含む
8	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや強い	やや強い	パミスを含む
9	10YR3/4	暗褐	締まりやや強い	やや強い	ATブロック・炭化物・焼土粒微量に含む
10	10YR4/2	灰黄褐	締まりやや弱い	やや強い	シラスを含む
11	10YR4/2	灰黄褐	締まりやや弱い	やや強い	ATブロックを含む　虎口通路埋土
12	10YR4/4	褐	締まり弱い	やや弱い	AT含む

	色調		硬度	粘性	備考
13	10YR4/6	褐	締まり弱い	やや強い	AT含む
14	10YR4/3	にぶい黄褐	締まり非常に強い	弱い	硬化面　東側堀埋土
15	10YR3/3	暗褐	締まりやや弱い	やや強い	多量の炭化物含む　焼土含む　東側堀埋土
16	10YR3/3	暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	少量の炭化物・焼土含む　東側堀埋土
17	10YR4/3	にぶい黄褐	締まりやや強い	やや弱い	少量の炭化物・橙色ロームブロック含む　東側堀埋土
18	10YR3/4	暗褐	締まりやや弱い	やや強い	中量の炭化物・焼土粒含む　東側堀埋土
19	10YR4/4	褐	締まりやや強い	やや弱い	ATブロック微量に含む　東側堀埋土
20	10YR3/3	暗褐	締まりやや強い	やや弱い	ATブロック微量に含む　東側堀埋土
21	10YR3/3	暗褐	締まりやや弱い	やや強い	炭化物少量含む　東側堀埋土
22	10YR3/4	暗褐	締まりやや強い	やや強い	炭化物少量含む　東側堀埋土
23	10YR3/3	暗褐	締まりやや強い	やや強い	東側堀埋土
24	10YR4/6	褐	締まりやや強い	やや強い	ATブロック少量含む　土坑埋土

第11図　B調査区南壁土層堆積状況実測図　（S＝1/60）

がりが確認されたため、堀と判明した。深さは約2.7m、幅は底面で1.8m、上部では2.7m以上を測る。横断面は台形でいわゆる箱堀であるが、下半は垂直に近い角度で立ち上がる。底面には硬化面が形成されており、東端には排水溝とみられる小溝が設けられている。埋土は多量の地山ブロックを含む層、炭化物、焼土、壁土などの不純物を多量に含む層などで構成されており、明らかに埋め戻された状況を示している。また上位層で廃棄された地輪と見られる凝灰岩片も検出された。遺物は16世紀後半に位置付けられるものが中心である。白磁、青花などの輸入磁器、備前焼、土師質の坏、皿、石臼が前述の造成土に混ざった状況で出土した。

また堀の一部では上位層において埋め戻した後に形成された硬化面が検出された。この硬化面より下層で炭化物が多量に検出された層が確認され、その層から採取された炭化物をＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を行ったところ、295±20年BP（1520～1560年）という結果が得られている。

１号竪穴建物　虎口に隣接する位置で検出された、一辺約３m、深さ約 0.5mの竪穴建物である。明確な主柱穴はもたず、壁際に直径10cm程度の細い柱穴を多く配置し上部を支える構造である。遺物は床面付近で土師器皿の破片、同じく床面付近で炭化材、炭化米が検出された。この１号竪穴建物が埋没した後に東側堀は掘削されており、その時に建物の東側は削平されている。

２　小結　－虎口部分の変遷について－

曲輪７の虎口付近の遺構の変遷について若干の記述を行い小結としたい。

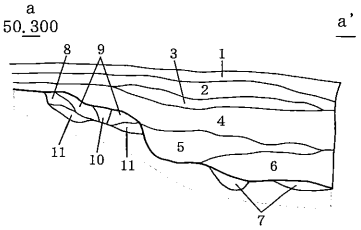
虎口付近で最も時期が遡る遺構は１号竪穴建物である。土師器皿の破片が出土しているが宮崎平野では編年が確立していないため時期を確定し得ない。また１号竪穴建物の時期の虎口構造については遺構が確認されていないが、この建物の性格は、建物の規模と曲輪全体の位置から鑑みると、曲輪の入口を守る詰所のような施設であったと想定される。

次に１号竪穴建物が埋没した後に、その埋土を掘り込み東側堀が掘削される。ただし廃棄された時期は前述したとおり時期幅をもつものの明らかであるが、開削された時期は明らかではない。またこの堀は床面に硬化面が形成されていることから、通路、つまり虎口として利用されていた可能性も指摘できる。

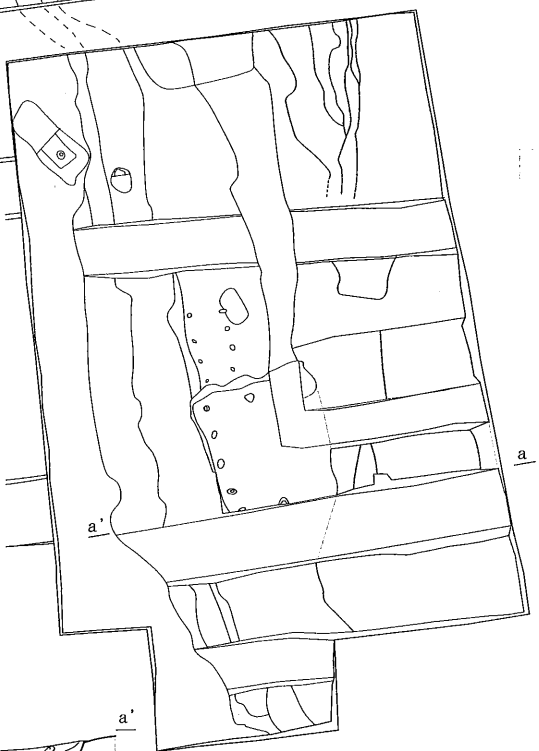
この堀（旧虎口）が埋め戻された後に虎口（新虎口）が造作される。段状に掘削した土は堀（旧虎口）を埋め戻す造成土の一部にも使用されたとみられる。使用された時期は旧虎口が廃棄されたと考えられる16世紀後半から穆佐城が廃城になる17世紀初頭までの短期間であったと想定できる。通路部分床面から明確な硬化面が検出されなかったのは、床面がATであるということの上に、この短期間の使用、という理由も考えられる。さらにその防御性は旧虎口と比較すると格段に低いものになっている。可能性としては、調査区外の位置に、他に防御を高める堀等の施設を併設したか、伊東氏が豊後国へ退去した1577年以降に、島津氏による日向国支配が安定化した後の造成が想定できる。

＊11号土坑土色

	色調		硬度	粘性	備考
1	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	炭化物含む
2	10YR5/4	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	
3	10YR5/6	黄褐	締まりやや強い	やや弱い	AT・ピンクシラス含む
4	10YR5/6	黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATを少量含む
5	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATを含む
6	10YR5/4	にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATを含む
7	10YR3/4	暗褐	締まり弱い	やや弱い	AT・炭化物少量含む
8	10YR3/3	暗褐	締まり弱い	やや弱い	AT・炭化物少量含む
9	10YR4/4	褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT・白色シラス多量に含む
10	10YR4/4	褐	締まり弱い	弱い	AT多量に含む
11	AT主体土				
12	AT主体土		締まりやや弱い	無	10YR4/3にぶい黄褐色土混じる
13	AT主体土				
14	12と同質				
15	10YR3/3	暗褐	締まり弱い	やや弱い	ATを含む
16	10YR6/4	にぶい黄褐	締まりやや弱い	無	ピンクシラス崩落土
17	10YR6/3	にぶい黄褐	締まり弱い	弱い	白色シラス含む
18	10YR4/3	にぶい黄褐色	締まりやや弱い	やや弱い	AT含む



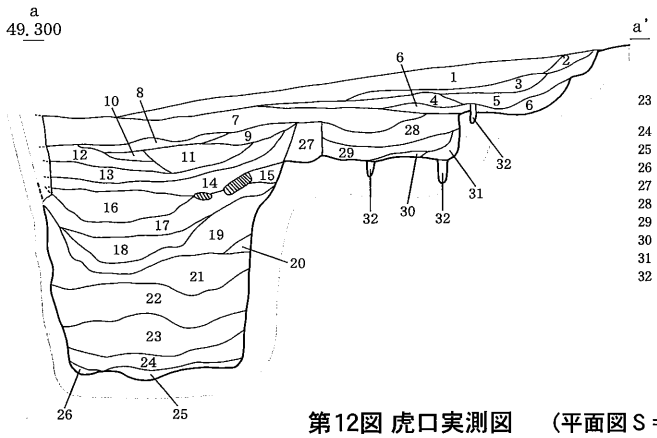
	色調	硬度	粘性	備考
1	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや弱い	表土
2	10YR4/4 褐	締まりやや強い	やや弱い	
3	10YR3/3 暗褐	締まりやや強い	弱い	スコリア含む
4	10YR2/3 黒褐	締まりやや弱い	やや弱い	スコリア多量に含む
5	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや強い	やや強い	
6	10YR3/4 暗褐	締まりやや強い	やや弱い	スコリア含む
7	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや弱い	
8	10YR3/3 暗褐	締まりやや強い	やや弱い	スコリア含む
9	10YR3/3 暗褐	締まりやや強い	やや弱い	スコリア多量に含む
10	9に2次堆積のアカホヤが多量に混ざる			
11	2次堆積アカホヤ層			



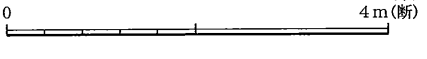
虎口

東側堀

	色調	硬度	粘性	備考
1	10YR3/4 暗褐	締まりやや弱い	やや強い	スコリア含む
2	7.5YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや強い	スコリア少量含む
3	10YR3/4 暗褐	締まり弱い	やや強い	スコリア多量に含む
4	7.5YR4/3 にぶい黄褐	締まり弱い	やや強い	スコリア少量含む
5	10YR4/3 にぶい黄褐	締まり弱い	やや強い	スコリア少量含む
6	10YR4/6 褐	締まりやや弱い	やや強い	ATブロック少量含む
7	10YR4/4 褐	締まりやや強い	やや強い	スコリア・AT小ブロック 炭化物微量に含む
8	10YR3/4 暗褐	締まりやや弱い	やや強い	スコリア含む
9	10YR3/3 暗褐	締まりやや強い	やや弱い	スコリア含む
10	10YR4/4 褐	締まりやや強い	やや弱い	褐色ローム多量に含む
11	10YR3/2 黒褐	締まりやや強い	やや強い	焼土・炭化物少量含む
12	10YR3/3 暗褐	締まりやや強い	やや弱い	スコリア少量含む
13	10YR3/4 暗褐	締まりやや強い	やや弱い	スコリア・AT小ブロック 小林降下軽石含む
14	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや弱い	スコリア微量に含む
15	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや弱い	ATブロック含む
16	10YR4/4 褐	締まりやや強い	やや弱い	3～5cm程度の軽石微量に含む 焼土・壁土含む
17	10YR3/4 暗褐	締まりやや強い	やや弱い	炭化物微量に含む
18	10YR3/2 黒褐	締まりやや強い	やや弱い	AT小ブロック含む
19	10YR3/4 暗褐	締まりやや強い	やや強い	小林降下軽石層小ブロック 炭化物少量含む
20	10YR3/3 暗褐	締まりやや強い	やや強い	橙色ロームブロック微量に含む
21	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや強い	やや強い	ATブロック少量含む
22	10YR4/6 褐	締まりやや強い	やや強い	



	色調	硬度	粘性	備考
23	10YR4/4 褐	締まりやや強い	やや強い	ATブロック・ロームブロック シラス多量に含む
24	ATブロック・シラス主体土			
25	10YR4/2 灰黄褐	締まり非常に強い	弱い	小礫微量に含む
26	10YR4/2 灰黄褐	締まりやや弱い	無	排水溝埋土
27	10YR3/4 暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	AT小ブロック含む
28	10YR4/6 褐	締まりやや弱い	やや強い	AT小ブロック・炭化物微量に含む
29	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや強い	AT小ブロック・炭化物微量に含む
30	10YR4/6 褐	締まりやや弱い	やや強い	AT小ブロック含む
31	10YR4/4 褐	締まりやや弱い	やや強い	AT小ブロック・炭化物少量含む
32	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	やや強い	ATブロック含む



第12図 虎口実測図 （平面図S＝1/120, 断面図S＝1/80）

トレンチ調査区

平成20年度調査時に、曲輪の東半部に東西方向のトレンチを３本設定した。南から１～３トレンチとしたが、１、２トレンチの東端、３トレンチは７Ｂ調査区内のため、ここでは７Ｂ調査区に含まれなかった部分について主要遺構の記述をしたい。

（１）１トレンチ

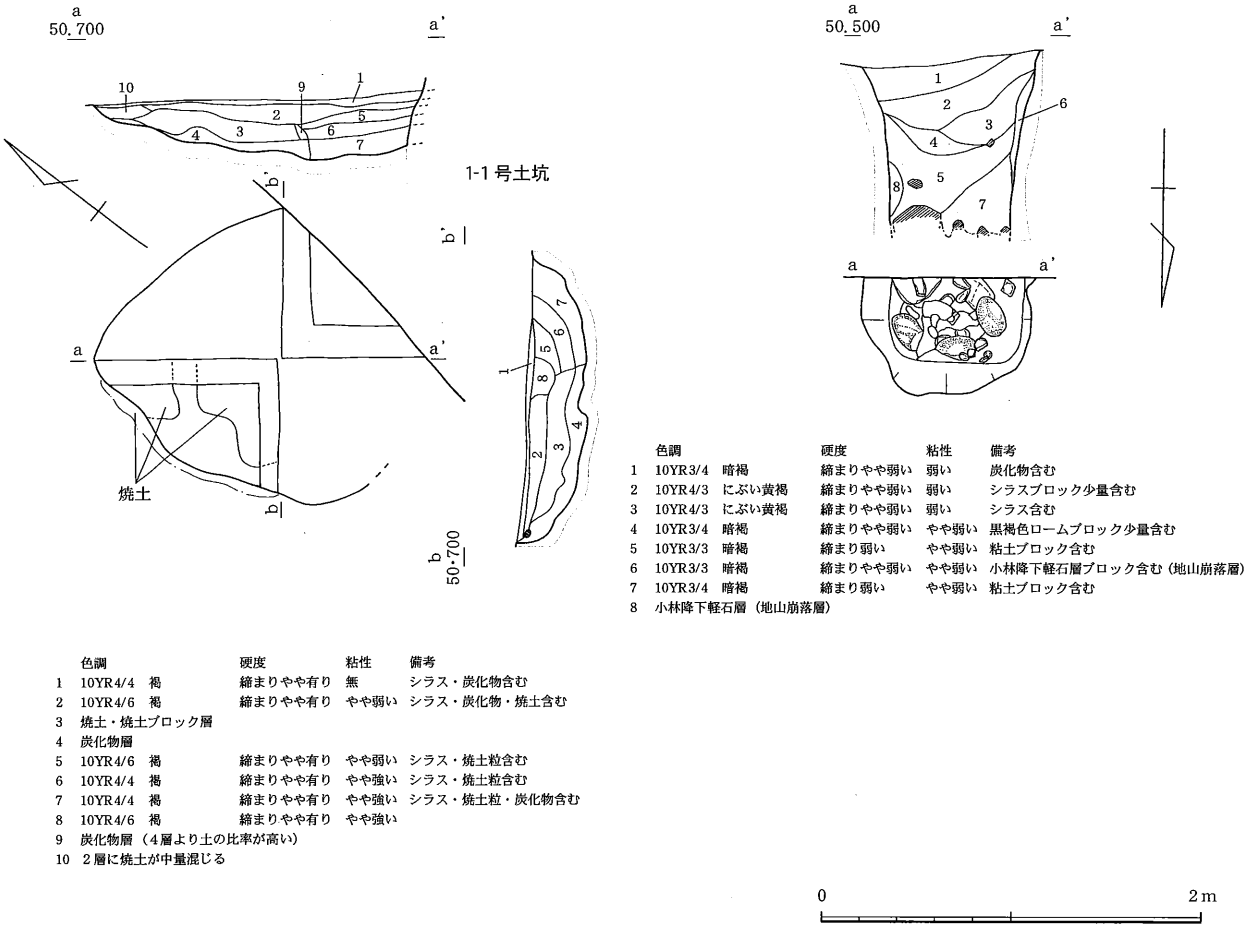
１トレンチは曲輪７の南東部に設定した。トレンチ西端付近において、土坑２基、溝１条、トレンチ中央付近で土坑２基、溝１条、ピット18基を検出した。

１－１号土坑　長軸1.5m以上、短軸約1.5m、深さ約0.4mを測る。土坑南西部は被熱により硬化した焼土が集中するが、北東部は焼土が粒子状に含まれる程度である。埋土も同様に南西部の最下層は炭化物層、その上位に焼土層が堆積するが、北東部は微量の炭化物を含む褐色のシルト層で構成される。南西部の堆積状況からみると、炭化物層が焼土層にパックされたような状況で検出されたことから、焼土層部分は天井部を構成していたと考えられる。

（２）２トレンチ

２トレンチは曲輪７の東部ほぼ中央に設定した。トレンチ西側で土坑３基、ピット９基が検出されたが中央以東ではピット２基が検出されるに止まり、遺構の希薄地帯である。

２－１号土坑　トレンチ壁にかかっており検出は土坑の半分程度と想定される。おそらく短軸となる東西方向は 0.9mを測り、深さは１m付近で多量の礫や粘土による構造物と思われる状況が確認されたため、下層の調査を行っていない。壁面は垂直に近い角度で立ち上がる。



	色調	硬度	粘性	備考
1	10YR3/4 暗褐	締まりやや弱い	弱い	炭化物含む
2	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	弱い	シラスブロック少量含む
3	10YR4/3 にぶい黄褐	締まりやや弱い	弱い	シラス含む
4	10YR3/4 暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	黒褐色ロームブロック少量含む
5	10YR3/3 暗褐	締まり弱い	やや弱い	粘土ブロック含む
6	10YR3/3 暗褐	締まりやや弱い	やや弱い	小林降下軽石層ブロック含む（地山崩落層）
7	10YR3/4 暗褐	締まり弱い	やや弱い	粘土ブロック含む
8	小林降下軽石層（地山崩落層）			

	色調	硬度	粘性	備考
1	10YR4/4 褐	締まりやや有り	無	シラス・炭化物含む
2	10YR4/6 褐	締まりやや有り	やや弱い	シラス・炭化物・焼土含む
3	焼土・焼土ブロック層			
4	炭化物層			
5	10YR4/6 褐	締まりやや有り	やや弱い	シラス・焼土粒含む
6	10YR4/4 褐	締まりやや有り	やや強い	シラス・焼土粒含む
7	10YR4/4 褐	締まりやや有り	やや強い	シラス・焼土粒・炭化物含む
8	10YR4/6 褐	締まりやや有り	やや強い	
9	炭化物層（4層より土の比率が高い）			
10	2層に焼土が中量混じる			

0　2m

第13図 トレンチ内土坑実測図　（S＝1/40）

3　出土遺物

ここでは今回の発掘調査で出土した遺物の中で主要なものを取り上げることにする。

1から7は2号土坑から出土した遺物である。1はコバルトブルーの青釉が施された小皿である。釉は非常に薄く、横方向の施釉痕跡に沿って素地が透けて見える箇所がある。2は白磁香炉である。色調がやや青みがかっている。施釉前に切彫で平行方向に施文する。3は白磁皿である。型押により花弁状の体部となっている。作りがやや粗雑で釉も灰色がかっている。4は青磁碗である。体部外面に退化した連弁文を施す。5は青花皿である。見込に十字花文を施す。6は備前擂鉢である。口縁部は逆「く」の字状に屈曲し、外面に稜線が設けられている。残存部には擂目がほとんど残っておらず条数は不明である。7は備前壺底部である。やや上げ底を呈す。

8は10号土坑から出土した土師器坏である。丁寧な回転ナデ、ナデにより調整されており、底部には乾燥台の痕跡とみられる板目状の圧痕が残されている。

9、10は12号土坑から出土した土師器小皿と坏である。9は底部糸切の後に乾燥台の板目状痕跡が残されている。10は口縁部を摘まみ出し外反する。底部は糸切底である。

11は24号土坑から出土した土師器小皿である。9と比較するとやや器高があるが体部から口縁部が一体となり摘まみだされているため小皿とした。底部は糸切底である。

12は18号土坑から出土した備前壺である。口縁部は玉縁を呈し、頸部は直立に立ち上がる。

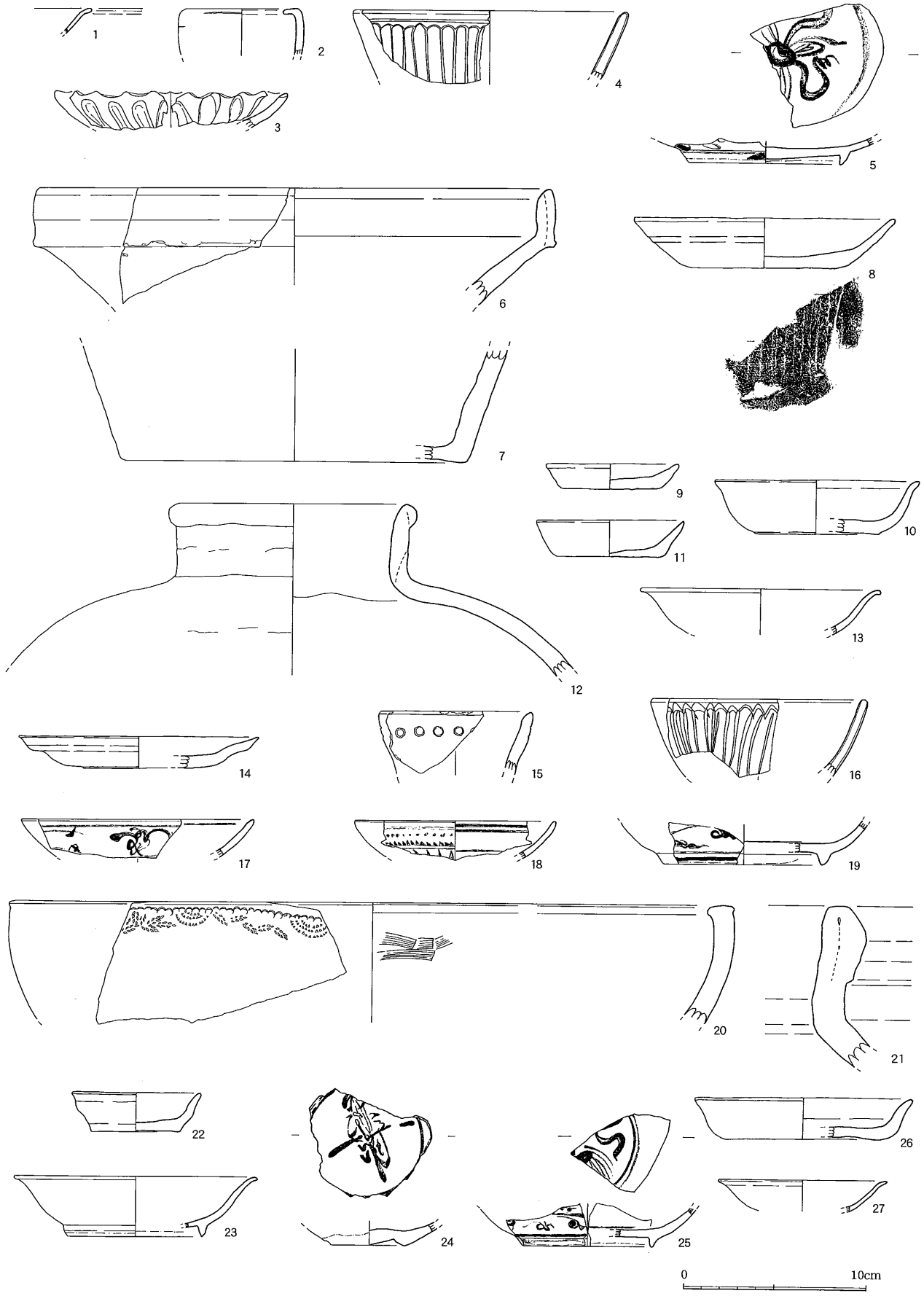
13は通路状遺構から出土した白磁皿である。器壁が薄く口縁部が外反するいわゆる「端反り」の形態を呈する。釉薬に灰色の斑紋が多くみられる。

14から21は中央堀から出土した遺物である。14は土師器皿である。回転ナデを施す時に体部の中央付近を強く摘まむことにより段が生じている。搬入品とみられ体部は緩い角度で大きく開き、在地の土師器皿、坏とは一線を画す。いわゆる「京都系」の土師皿の影響下に製作されたものと思われるが産地は明らかではない。15は土師質の土器であるが器種は不明である。体部外面に竹管文を施す。そのサイズから香炉の可能性を指摘しておきたい。16は青磁碗である。体部外面にはかなり退化した連弁文を施している。17、18は青花皿である。いずれも口径は小さく体部は内湾する。底部は欠損しているが、明確な高台をもたないタイプである。17は文字文、18は波涛文、芭蕉文とみられる文様を施す。19も青花皿である。17、18とは異なり口縁部が外反し、断面台形状の高台が付く。畳付の釉を削り取っている。20は瓦質土器の火鉢である。口縁部付近外面にスタンプ文で樹木の葉のような模様と、三角形のスタンプを半円形に配置する模様、半裁竹管文に似た模様の三種類の模様を施す。体部は緩やかに内湾し口縁端部は内外に肥厚する。胎土は瓦質土器としてはかなり良好である。21は備前大甕の口縁部である。口縁部は外面に折り返して肥厚する。

22から25は東側堀から出土した遺物である。22は土師器小皿である。サイズから小皿としたが器形は坏を縮小したような特殊な器形である。底部は糸切底である。23は白磁皿である。器壁が薄く、口縁部が外反する「端反り」の形態を呈する。高台は断面台形状を呈し、畳付の釉を削り取っている。24は青花皿である。底部以外を欠損しているが、17、18のような形態を呈すると思われる。底部は露胎であり、その部分のみ焼がやや甘く陶器質になっている。見込には文字文を施している。25は青花皿である。口縁部が外反する器形を呈するタイプであろう。見込は十字花文が施されているとみられ、畳付の釉は削り取られている。

26は1号竪穴建物出土の土師器皿である。体部から口縁部が外反する形態は10の坏に似るが口径が大きく器高が低いため皿とした。底部は糸切底である。

27は1と同じコバルトブルーの青釉が施された小皿である。同一個体と思われるが接合はしなかった。小片ではあるが口径は9cm程度に復元できた。残存部の下端に釉溜りが確認されたため高台を有すると思われる。



第14図 曲輪７出土遺物実測図　（S＝1/3）

掲載番号	出土位置	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土 色調	成形・調整等	備考	注記内容
1	2号土坑	青釉 皿	—	—	—	精良 灰白	回転ナデ後 施釉	交趾焼か	MSJ7 SC2
2	2号土坑	白磁 香炉	(6.4)	—	—	精良 灰白	横方向の 切彫文有り		MSJ7 SC2
3	2号土坑	白磁 皿	(12.6)	—	—	精良 灰白		釉が灰色がかる	MSJ7 SC2
4	2号土坑	青磁 碗	(14.8)	—	—	精良 オリーブ灰	連弁文		MSJ7 SC2 8
5	2号土坑	青花 皿	—	(8.0)	—	精良 灰白	十字花文・一圏線 （見込）		MSJ7 SC2 9
6	2号土坑	備前 擂鉢	(27.2)	—	—	良 灰	回転ナデ		MSJ7 SC2 3
7	2号土坑	備前 壺	—	(18.0)	—	やや良 黄灰	横ナデ		MSJ7 SC2 6
8	10号土坑	土師器 皿	(13.7)	(7.6)	(2.7)	やや良 黄橙	回転ナデ 丁寧なナデ	底部板目状圧痕	MSJ7 SC10 MSJ7C-2包含層
9	12号土坑	土師器 皿	7.1	5.6	1.4	やや良 にぶい黄橙	回転ナデ 底部平行方向ナデ	糸切底	MSJ7 SC12 MSJ7 SC12下層
10	12号土坑	土師器 坏	(10.9)	(6.7)	2.9	やや良 橙	回転ナデ	糸切底	MSJ7 SC12
11	24号土坑	土師器 皿	7.8	5.7	2.0	やや良 にぶい橙	回転ナデ	糸切底・燈明皿	MSJ7 3Tr SC4 1層
12	18号土坑	備前 壺	12.1	—	—	やや良 黒褐	指頭圧 回転ナデ		MSJ7-21 SC18
13	通路状遺構	白磁 皿	(12.8)	—	—	精良 灰白		灰色の斑紋が多量に見られる	MSJ7 SE1
14	中央堀	土師器 皿	(13.0)	(6.0)	1.7	良 浅黄橙	回転ナデ	糸切底 京都系の模倣か	MSJ7 SE3
15	中央堀	土師器 不明	(8.2)	—	—	やや良 浅黄橙	回転ナデ 竹管文	香炉か	MSJ7 SE3
16	中央堀	青磁 碗	(11.2)	—	—	精良 オリーブ灰	連弁文		MSJ7 SE3
17	中央堀	青花 皿	(12.6)	—	—	精良 灰白	文字文 圏線		MSJ7 SE3
18	中央堀	青花 皿	(10.8)	—	—	精良 灰白	波涛文・芭蕉文 圏線		MSJ7 SE3
19	中央堀	青花 皿	—	(8.6)	—	精良 灰白	唐草文 圏線		MSJ7 SE3
20	中央堀	瓦質 火鉢	(39.4)	—	—	良 浅黄橙	スタンプによる 半竹管文、樹葉文		MSJ7 SE3 上層
21	中央堀	備前系 大甕	—	—	—	やや粗 黒褐	ナデ		MSJ7 SE3 下層
22	東側堀	土師器 皿	6.8	4.7	2.0	やや良 灰白	回転ナデ ナデ	糸切底	MSJ7-21 堀
23	東側堀	白磁 皿	(13.0)	(7.3)	3.3	精良 灰白		畳付釉剥	MSJ7-21 堀 礫層
24	東側堀	青花 皿	—	4.1	—	精良 灰白	文字文	畳付露胎	MSJ7-21 堀 下層
25	東側堀	青花 皿	—	(7.0)	—	精良 灰白	唐草文 十字花文・二圏線	畳付釉剥	MSJ7-21 堀 硬化面上層
26	竪穴建物	土師器 皿	(11.4)	(8.6)	2.3	やや良 橙	回転ナデ	糸切底	MSJ7 1Tr 虎口3D
27	表土	青釉 皿	(9.0)	—	—	精良 灰白	回転ナデ	交趾焼か	MSJ7-21 表土

第１表　出土遺物観察表

第Ⅳ章　総括

今回の調査で、これまで地表面の観察から推定することしかできなかった曲輪７の構造について重要な知見が得られた。未だ出土遺物の整理作業は完全ではないが、ここでは現時点で明らかになった点を纏め、総括としたい。

まず調査の結果、曲輪の形状は現在観察できる地表面とは大きく異なっていたことが明らかとなった。曲輪の中央には、曲輪を分断する堀が設けられ、また曲輪の東端部にも堀が設けられていた。これらの堀の底は硬化面が形成されており、堀としての機能と同時に通路としての機能も有していたことが想定される。この２つの堀は箱堀であること、壁際に排水溝状の小溝を設けることが共通しており、同時期に使用された遺構であると考えられる。そして両者は造成により穆佐城が存続している間に埋め戻される点も共通している。この大規模な普請は、曲輪７が主郭であることも加わって、城としての防御力を大幅に下げるものである。戦国期という時代背景を考えると、この普請は考え難いものであるが、前章でも記述したように、他により強固な防御施設を造作したか、島津氏による日向平定後の造成であれば理解できる。より強固な防御施設の候補としては、現在散策路として使用されている曲輪７東側の道が挙げられる。東側堀は現況の曲輪肩までの距離が非常に短く、堀の東側の肩が土塀程度しかない状況であり、構造上考え難い。そこで東側堀が活用されていた時期の曲輪肩が現在の道の東端であったと想定すれば、東側堀が埋め戻され、新しい虎口が造作されると同時に、曲輪東端を削る形で新たな堀が開削されたと考えられ、構造上の問題は解決する。現在の調査成果では想像上の産物でしかないが、今後の調査でトレンチを設定し確認する予定である。

次に曲輪の空間利用について述べたい。前述のとおり曲輪７は中央の堀で分割して利用していた時期が存在するが、東西でその空間利用に大きな差が見られる。堀より西側、つまり奥は掘立柱建物の柱穴が多数検出されるのに対し、東側では柱穴は検出されるものの格段に少なく、空閑地が目立つ。ここから西側は建物が配される空間、東側は前庭のような役目をもった空間が想定される。このように明らかに堀を隔てて東西で空間の使い分けをしていたことがわかるが、堀が埋め戻された後の遺構も存在していることには留意しなければならない。

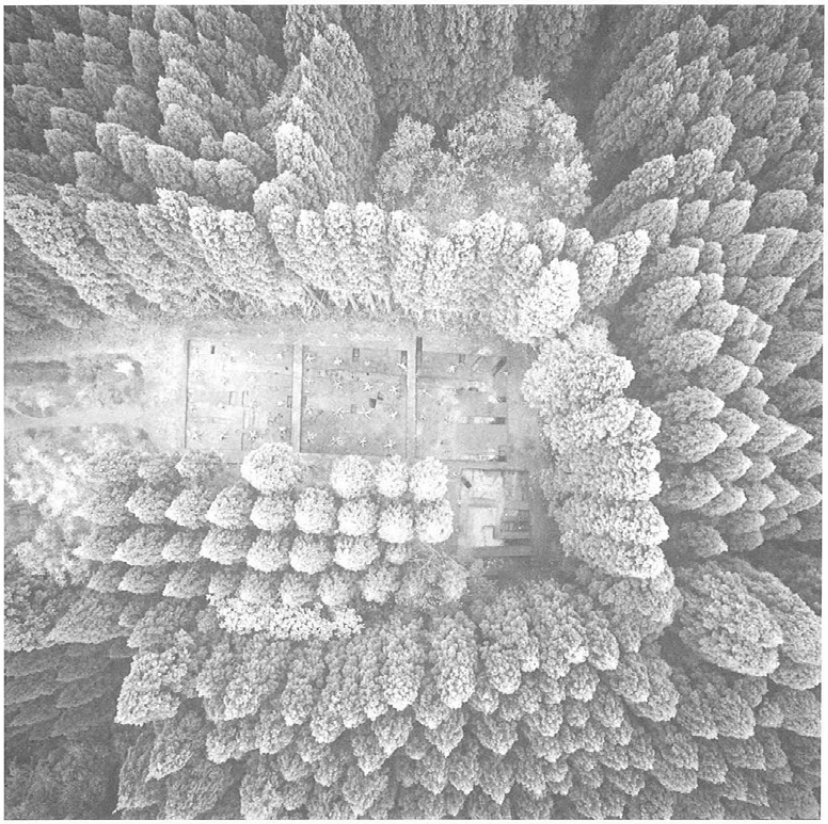
遺物に関しても特筆すべき点がある。それは「出土遺物量の少なさ」である。両年度合わせると 1,000 ㎡を超える面積を調査したが、コンテナ数にして僅か７コンテナというものである。確かに山城は出土遺物が少ない傾向にあるとは言え、110,000 ㎡を超える城域をもつ大規模中世城郭の主郭にも関わらずこの出土量である。この極めて少数の出土遺物は穆佐城の構造と関連すると考えられる。Ⅰ章でも記述したが、穆佐城は曲輪７と曲輪８が大規模な掘切と一つの土塁によって守られており、そのため両者を合わせて主郭と想定されている。ここで鍵となるのが前述した「空間分化」である。曲輪７単独でも中央の堀によって空間分化されていたが、曲輪８と合わせて更なる空間分化を行っていた可能性が指摘できる。曲輪７の遺物出土量の少なさは、日常生活空間ではないためと考えられるのである。日常生活は隣接する曲輪８で行い、政治など非日常の行為を曲輪７で行っていたと考えると、出土する遺物が少量であるということも理解しやすい。

以上、総括として記述を行ってきたが、曲輪８と合わせて主郭と考えられる構造や整理作業が完全に終了していないということも相まって、「推定」、「想定」の部分が大部分を占めている状況にある。これらの「推定」、「想定」を今後の発掘調査、整理作業を行う過程で取り去っていきたい。

最後になりましたが穆佐城保存整備専門委員会の委員の皆様方を始め、発掘調査、整理作業に参加してくださった作業員の皆様など、穆佐城跡の保存整備に関わったすべての方々に厚く感謝致します。

１．平成20年度調査区垂直写真

２．平成20年度調査区垂直遠景写真



１．平成21年度調査区垂直写真

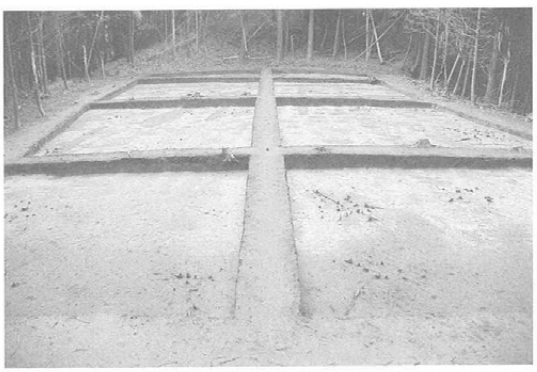
２．虎口調査状況（南東から）

１．１－１号土坑

２．２－１号土坑

３．２トレンチ全景写真

４．３トレンチ全景写真



５．A調査区遺構検出状況

６．通路状遺構（南から）

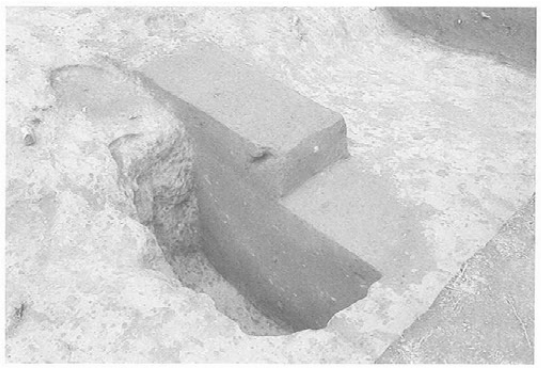
７．中央堀北壁土層堆積状況

８．中央堀遺物出土状況

１．土塁北トレンチ全景

２．土塁北トレンチ土層堆積状況

３．土塁南トレンチ全景

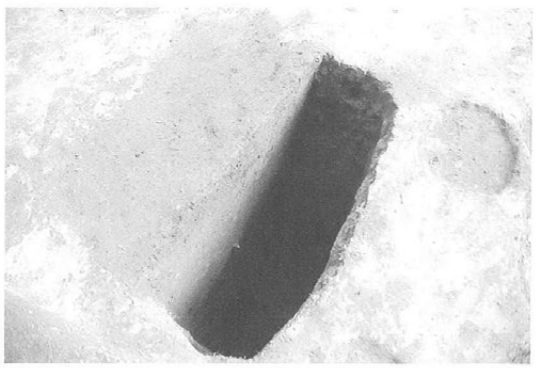


４．１号土坑土層堆積状況

５．２号土坑遺物出土状況

６．７号土坑土層堆積状況

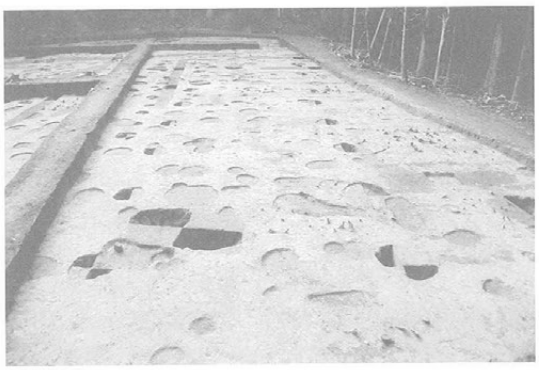
７．11号土坑土層堆積状況



８．12号土坑土層堆積状況

1．1号掘立柱建物検出状況

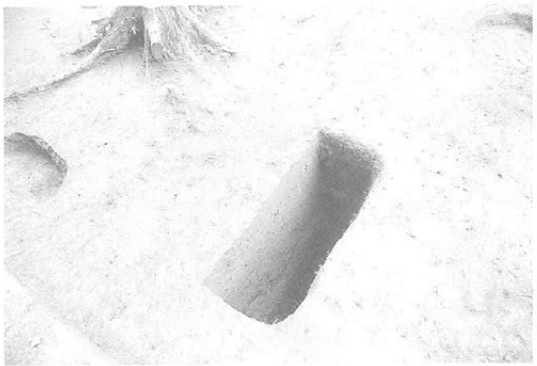
2．2号掘立柱建物検出状況



3．1号掘立柱建物ピット半裁状況

4．1号掘立柱建物ピット土層堆積状況

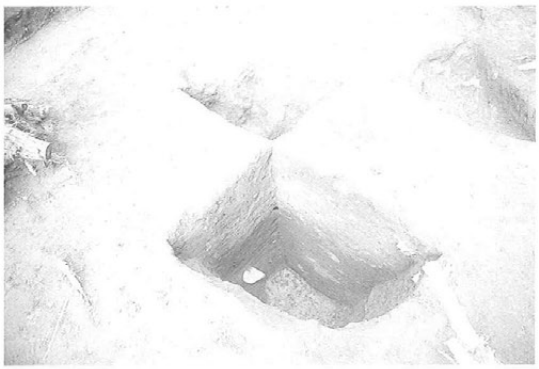
5．2号掘立柱建物ピット半裁状況



6．17号土坑半裁状況

7．18号土坑遺物出土状況

8．18号土坑1/4裁状況



1．21号土坑1/4裁状況

2．東側堀遺物出土状況

3．北側落込み土層堆積状況

4．B調査区調査終了時状況

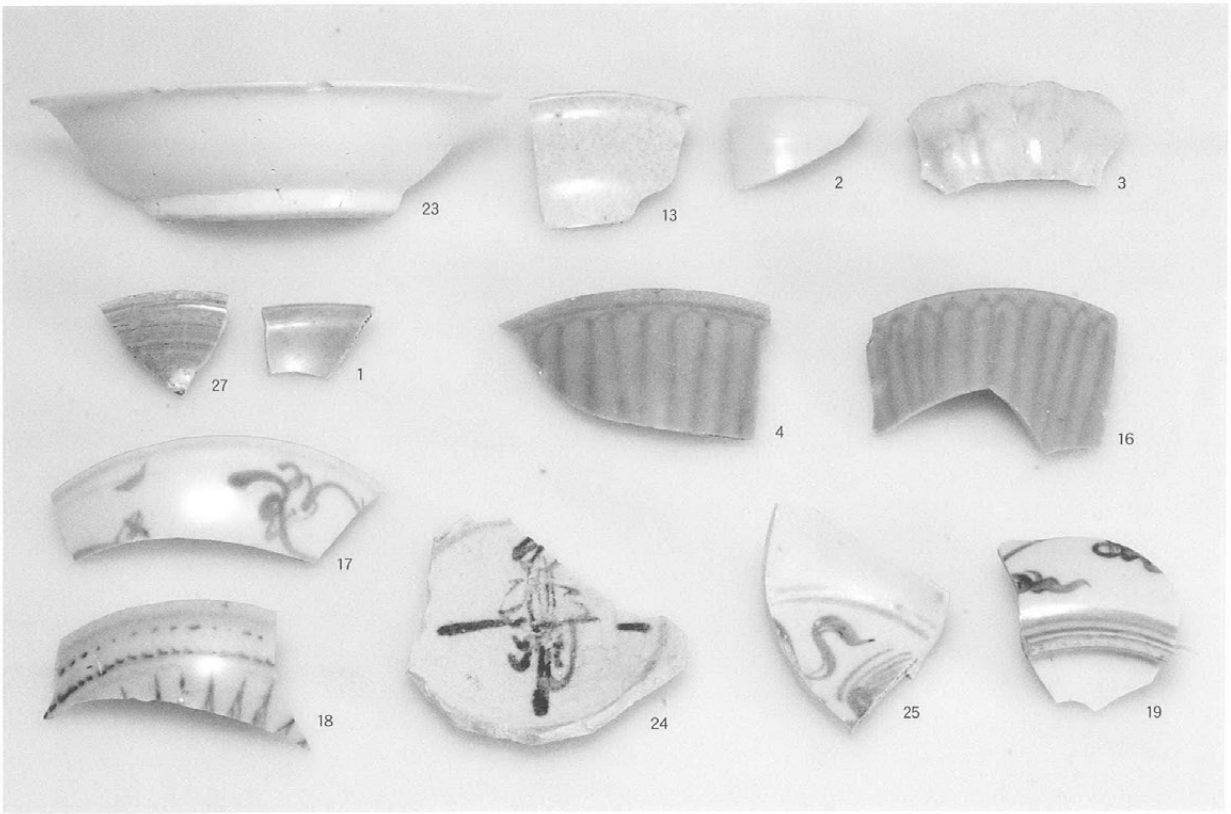
5．東側堀土層堆積状況

6．虎口調査状況（南から）

7．虎口廃棄時礫出土状況

8．虎口調査状況（北から）

１．曲輪７出土遺物（土師器・瓦質土器・陶器）



２．曲輪７出土遺物（白磁・青磁・青花）

報告書抄録

ふりがな	しせき　むかさじょうあと
書名	史跡　穆佐城跡
副書名	穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
巻次	Ⅳ
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第79集
編集者名	石村 友規
発行機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880-0805　宮崎市橘通東1丁目14番20号
発行年月日	2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
むかさじょうあと 穆佐城跡	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 たかおかちょう 高岡町 おやまだ 小山田 926、925-4	45201		31° 56′ 00″ 付近	131° 19′ 25″ 付近	20081008 ～20090312 20090625 ～20091201	653㎡ 416㎡

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
保存整備	城郭	中世	掘立柱建物 堀 虎口 土坑 通路状遺構	土師器皿・坏 青磁・白磁・青花 備前焼甕・擂鉢 鉄鎌・炭化米 鉄滓	曲輪中央において造成により埋められた堀を確認 曲輪東端において造成により埋められた堀を確認

宮崎市文化財調査報告書　第79集

史跡 穆佐城跡

穆佐城跡保存整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）

2010年3月
発　行　　宮崎市教育委員会